

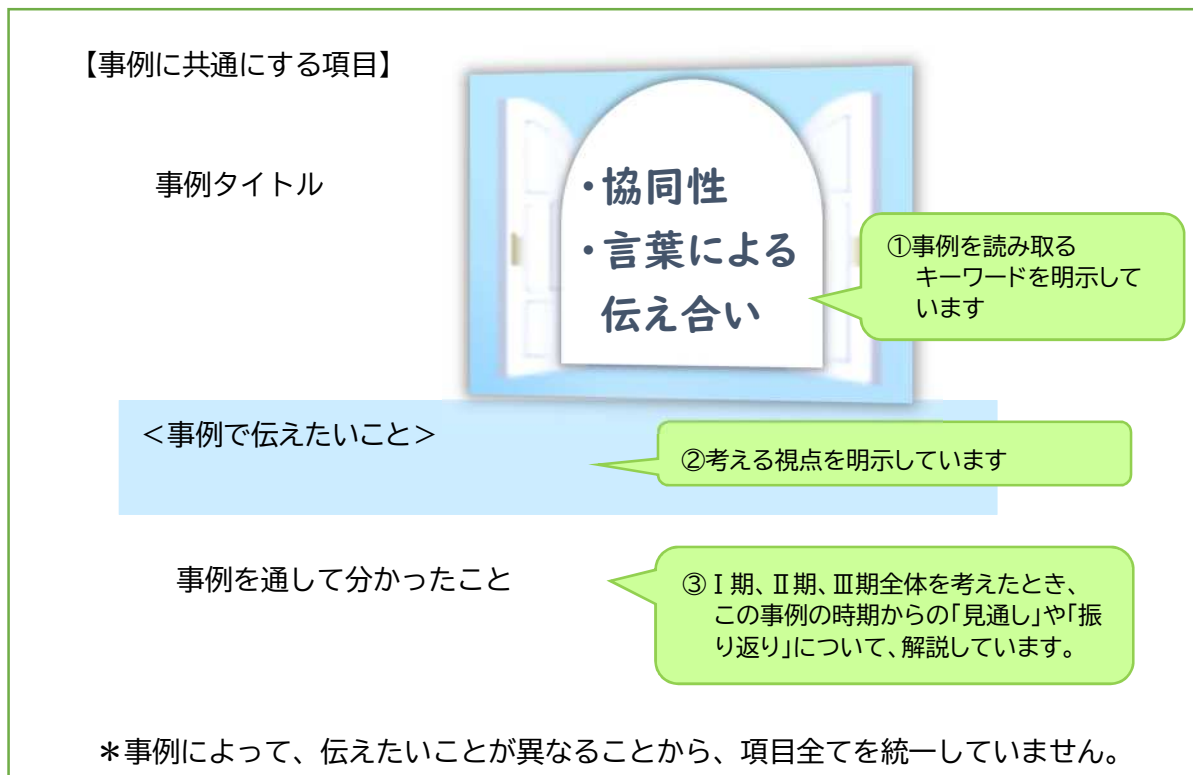
第2章

内容

【活用の意義】

本カリキュラムを活用する際には、子どもの具体的な姿を想像しながら、学びのつながりについて考えることができるように、実践から伝えたいことや考えてほしいことが記載されています。最後の項目には、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を見通したり振り返ったりする観点から解説し、架け橋期の教育の充実に向けて考えます。

事例の見方



1 実践例

事例を読み取る
キーワード

・協同性
・言葉による
伝え合い
・豊かな感性と
表現

事例1 I期（5歳児4月）

海賊になりたいー海賊ごっこー

<事例で伝えたいこと>

この事例では、日常の幼児たちのごっこ遊びがどのように展開していくのか、自分のイメージしたものをつくりながら継続して遊ぶ姿について考えてみます。

① 事例の概要

4歳児のとき、幼児たちに海賊が出てくる絵本を読み聞かせたところ、海賊に興味をもった。保育士が段ボールで簡単な囲いをつくると、それを小さな海賊船に見立てて、物語に出てくる海賊になったつもりで、「嵐が来た」「悪い海賊が来た」と言って船に隠れたり、夜になったと言って船の中で寝たりして海賊ごっこを楽しんでいた。

5歳児に進級し、幼児たちがイメージした海賊船を形にすると、海賊ごっこに必要な望遠鏡や舵、部屋などをつくったり、船の外の海を泳いだり、宝探しをしたりして遊ぶようになった。

② 具体的な遊びの様子

4歳児の2月、A児は、「きりんぐみ（5歳児）になったら、みんなで乗れるくらい大きな海賊船が作りたい!」と言っていた。

5歳児に進級すると、A児は、「みんなが乗れるくらいの海賊船をつくろうよ」と声をあげ、その言葉をきっかけに、いつもA児と一緒に遊んでいる二人の幼児も「つくろう!」と賛同した。保育士も「そうだね、もっと大きい海賊船が作りたいて言ってたよね。どこがいいかな」と尋ねると、A児や他の幼児が「ホールがいいんじゃない」「ホールが一番、広いよ」などと言った。「ホールがいい!」と意見が一致し、ホールに大きな海賊船をつくることになった。

保育士が段ボールを用意すると、幼児たちがガムテープを貼ってつないでいった。保育士と三人の幼児とで作り始めると「何をつくってるの?」と他児も興味をもち集まって来た。次第に増えていき、気付くと全員が船づくりに加わっていた。「ここはドアにしよう」と言って、取っ手をつける幼児もいた。

幼児が「色を塗って海賊船らしくしようよ」「色を塗りたい」などと言っていたので、保育士が、絵の具を用意しておくとして絵の具で模様をつけはじめ、「何色にする?」など絵本を見て相談しながら色を付けた。保育士は、「かっこいいね」「海賊船らしくなってきたね」などの言葉を掛け、船の囲いが完成した。船の形らしく見えるようになると、幼児たちは「望遠鏡をつけたい」「舵と椅子をつくりたい」「お料理をするところがあるよね」「ベッドはどこにする?」と次々にイメージがわいてきて、つくりたい小道具づくりが始まった。

保育士が、はさみや画用紙、折り紙、セロファンなど、色々な材料を用意しておく、それぞれがイメージしたものを自由につくっていった。

幼児の中から「海賊旗は、絵が上手なBちゃんにかいてもらおう」と声があがった。「私がかきたい」とC児が言うと、「Cちゃんは僕と色を塗ろう」と他の幼児が言う。B児が図鑑を見ながら大きな布にサメの絵をかくと、「ここは僕が塗るね」「私はここを塗るよ」と絵に色を塗っていく。

毎日、ホールに来ると、それぞれの幼児がつくり足していき、壊れると「先生、テープ貸してください」と言って自分たちで修繕していった。

幼児たちは、海賊ごっこを楽しむ中で、魚をつくり、船の外に泳がせて、魚を釣り、釣った魚で料理し、テーブルに並べて食べるまねをしたり、宝の地図をかき、それをみんなで見ながら島を探すふりをして、島の探検ごっこを楽しんだりしていた。宝箱には、キラキラの折り紙でつくった宝物がたくさん入っていた。幼児たちは、毎日、海賊船で遊び、1か月以上楽しんだ。

③ 環境の構成

- ・ホールの一角に海賊船を常に設置し継続して遊べるようにした。
- ・幼児たちのイメージに合うような様々な材料を用意した。遊びが広がっていくと、またつくりたいものが出てくるので、その都度、材料を用意して製作できるようにした。

④ 意図

- ・4歳時で楽しんだ経験を基に、幼児たちが興味をもった遊びのイメージをさらに膨らませて、空想の世界を楽しんでほしい。
- ・自分がイメージしたものや思いを実現できる楽しさを味わってほしい。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、省察する。）

- ・友達と「海賊」のイメージを共有して「海賊船」をつくり一緒に遊びを楽しんでいる。協同性
- ・遊びの中で、地図や海賊旗など、自分の思ったものをかいている。豊かな感性と表現
- ・自分の思ったことやイメージしたことを言葉で伝え合っている。言葉による伝え合い
- ・イメージを友達と共有して、「海賊」の物語の世界を楽しんでいる。豊かな感性と表現

⑥ 事例1をとおしてわかったこと（本事例の振り返りとⅡ期、Ⅲ期への見通し）

まず、保育士の指導について考えてみます。

この遊びのきっかけは、4歳児の終わり頃に幼児たちが、「進級したら、みんなが乗れるくらい大きな海賊船をつくりたい」という願いをもっていたことから始まります。

5歳児担任は、4歳児のときの担任が着任しました。進級して、幼児の願いが表出したそのときに、「もっと大きい海賊船がつくりたいって言ってたよね」と、保育士が幼児の願いを受け、覚えているという共感の言葉で受け止めたことは、持ち上がりの担任だからこそできる関わりであり、これからの5歳児の生活を自分たちでつくり出していくという意欲につながる重要な関わりとなりました。

そして、海賊船の遊びは、最初は、少人数の幼児たちによる遊びでしたが、遊びの場所をホールに移し、継続して場を残したことにより、直接、海賊ごっこをしていなかった幼児も、ホールでの遊びが目に入るようになったため、興味をもち、一緒に遊びたい気持ちがわき、結果として、多い人数での遊びへと変化しました。

これまで、あまり使用していなかったホールや新しく使えるようになる遊具があるなど、進級時ならではのわくわくした嬉しい気持ちを満たす環境になったからこそ、じっくり自分たちの遊びを楽しむことができました。もし、下学年のお世話や年長組としてしなければならないことばかりが継続してしまうと、自分たちでじっくりと遊ぶ時間がとれず、遊んだ実感が得られない可能性があります。

そのため、自分たちでじっくりとやりたい遊びができる時間をとったり、みんなで楽しく過ごす時間をつくったりすることは、年長組としての生活が始まる上で、とても重要です。

本事例では、みんなが乗ることができる大きな海賊船を積み木でつくったことは、ばらばらだった海賊のイメージが、ある程度同じようなイメージとなり、遊びのイメージを共有し、「こうしたい」「こうしよう」という遊びの方向性が共通になっていき、みんなでつくり上げる楽しさを感じる機会となりました。

次に、環境の工夫について考えてみます。

保育士は、積み木でつくった船を壊さずに毎日残しておくようにし、海賊シリーズの本を継続して読み聞かせをしました。その結果、遊びのイメージが一つだけではなく、絵本をとおして、遊び方のバリエーションが広がり、さらにイメージがふくらみ、ごっこ遊びが展開したものと思われます。このほか、自分たちでつくったものを大切に思い、壊れると進んで直すなど遊びに必要なものをつくる上での、技能面での獲得にもつながりました。

遊びの場を継続して残す場合、幼児が遊びの中で何を楽しんでいるのかを見極める必要はありますが、本事例の場合、幼児たちが必要な小道具をつくり足すなど、みんなでイメージを共有しながら、その中で、一人ひとりが自由にやりたいことを実現しており、「みんなで遊んで楽しかった」という経験を味わうことができたと考えられます。

I期では、大きなテーマの遊びでも、2、3人の幼児同士がそれぞれに自分の考えを出したり相手の考えを受け止め、受け入れたりして遊んでいたことが、結果的には「みんなで」楽しく遊ぶ経験につながったと考えられます。最初から、「みんなで」一つのイメージを共有するというよりは、2、3人の関係性を大事にしながら、やがて学級（クラス）全体の活動へとつなげていく援助をしたので、それぞれがイメージの中で遊ぶことを楽しめたのではないのでしょうか。

その後のⅡ期では、人数が増えても自信をもって自分のイメージや気持ちを伝えたり、友達の意見を聞いたり、うまくいかなくても折り合いをつけたりする経験につながり、劇づくりや卒園祝い会など、学級（クラス）のみんなでつくり上げていく協同性の育ちにつながっていきます。さらに、Ⅲ期では、学習の中での様々な表現を楽しむことにつながっていくと思われます。

事例2 I 期（5歳児5月）

せっかくつくったのに全然できない
—水路づくり—

事例を読み取る
キーワード

・試行錯誤
・思考力の芽生え
・物の性質と
仕組みの理解

<事例で伝えたいこと>

この事例では、友達と一緒に、樋から水を流すという目的を達成しようと試行錯誤しながら、自分たちの遊びを実現していく援助や、ものの性質や仕組みを理解していく姿について考えてみます。

① 事例の概要

砂場で穴を掘り始めた幼児3人が、樋を使って水を流すことを思い付き、穴まで水を流す道をつなげようと何度も試行錯誤していた。

② 具体的な遊びの様子

進級後、好きな遊びの際に一緒に遊ぶことが多いA児、B児、C児は、この日も戸外に出て一緒に砂場で遊び始める。

5歳児年長組になって使えるようになった長いスコップを使い、幼児のふくらはぎまで入る程度の大きな穴を掘っている。直径1メートル程度の大きな穴ができると、A児が「穴に水を入れてみよう」と言う。B児は「いいね」と言って、二人でバケツを使って5メートル程度離れた水汲み場のたらいから、バケツやじょうろを使って水を運んで穴に入れる。C児も加わり三人がそれぞれに水を穴に入れ、また汲みに行くことを繰り返すが、すぐに砂に水が染み込んでなくなってしまう。すると、A児が長さ60センチ程度の樋を一つ持ってきて、「これを水の道にしようよ」と先ほど作った穴につなげて置く。B児も「いいね!」と樋に水を流してみる。その様子を見たA児・C児は、「もっとつなげようよ」と樋を三つ、四つ持ってくる。先に置いた樋に二つの樋をつなげたところで水を流すが、高低差が少ないため水流が途中で止まり、樋のつなぎ目から半分以上の水が漏れてしまい、穴まで入る水の量が少ない。すると、C児が「水を全部流すには・・・」とつぶやきながら、瓶ケースなどの可動遊具を運んできて樋に傾斜をつけようとする。

教師が「Cくん、どうして瓶ケースを持ってきたの?」と聞くと、C児は「高いところから低いところにつなげればいいんだよ」と言う。教師が、「なるほど。高いところと低いところをつくるんだね。」と水を流すために高低差をつけることに気付いたC児の考えを認める声掛けをすると、A児が「階段みたいにすればいいんだ」と言って三人で瓶ケースを五つんでくる。三段と二段に重ね、階段のようにする。

三段重ねた瓶ケースから二段重ねたものに樋を渡した。樋は下の樋を上の上の樋の上に重ねるようにつなげている。穴につながるよう樋を五つつなげたところで、3人は水を汲みに行く。その途中に、A児が「靴が濡れちゃいそうだから、裸足になろう」と言い、3人で裸足になる。教師は

「水が流れるかな。楽しみだね」と言い、見守る。水をバケツで汲み終え、B児がバケツの水を流してみると、樋のつなぎ目で水がこぼれて穴まで届かなかった。A児が「勢いよく流さないと。Bくん、一緒に流そう」とA児・B児が同時に水を流すと、樋のつなぎ目で漏れ、樋が瓶ケースから落ちる。勢いよく流すことでつなげた樋の水路が壊れることが何度かあり、その度に元の通りに直す。三度目に水を流して水路が壊れると、B児が「せっかくつくったのに、全然できないじゃん」と言う。C児が「水が多いと重くて壊れちゃうんだよ」と言い、じょうろを使って慎重に少しずつ水を流すが、途中の樋の重なる部分で水が漏れて穴まで届かない。そこで、教師が、「なんでだろうね。ちょっと調べてみる？」と青いスズランテープを水と一緒に流してみると、スズランテープが、樋が重なる部分で水と一緒に下に落ちる。それを見て、「これだと、ここ（樋）が下になっているから漏れちゃうんだ」とC児が言う。B児も「そこ（樋が下になっている部分）がダメだったんだ」と言って、B児が一段目の樋の重ね方を変え、A児とC児も樋の重ね方を確認したり変えたりする。水を流してみると、穴まで水が届き、3人で「やっと流れたね。」「やったー！」と喜ぶ。その後、3人で水の中に足を入れたり水を流したりして楽しんだ。



降園時に、今日の出来事を学級全体に伝える場面で、3人一緒に挙手をし、前に出て発表した。教師が、階段のように瓶ケースを重ねて高低差をつけたことや樋の重ね方に気付いたことなど、水路をつくる際の試行錯誤や、一人ではできないことを友達と力を合わせて実現したことなどを補足し、他の幼児からも「見てたよ。私もやってみたいと思った」「水が流れててすごいと思った」などと感想をもらい、嬉しそうにしていた。

③ 環境の構成

- ・ 砂場には、乗り物や型抜き、お皿など具体的なイメージをもちやすい遊具とバケツやスコップ、じょうろなどの道具を用意する。
- ・ 5歳児用のスコップは、友達と一緒に場を作る動きにつながりやすいように、柄の長いものを用意し力を入れて砂を掘ったり運んだりできるようにする。
- ・ 様々な構成ができるように、直線の樋や曲がった配管などを用意し、幼児が選び取れるようにする。
- ・ 幼児が水が流れない原因に気付けるように、スズランテープを水と一緒に流すことで水がどこ

で漏れているかわかりやすいようにする。

- ・ 瓶ケース、お風呂椅子、ベンチなど、場づくりに活用できて幼児の力で運べる可動遊具を園庭に用意し、遊びのイメージに合わせた構成ができるようにする。
- ・ 砂場の遊びに水を使う時期や水を使う人数を考慮し、砂場の遊びの際は水道のホースや蛇口から直接水を汲まずに、近くにたらいを置いて、たらいに溜まった水を運んで使うようにする。
- ・ 靴が濡れる遊びになる場合や、心地よさを味わいたい場合などに裸足になれるように、すのこと足ふきタオルを用意しておく。すのこの大きさは、数人が周りに靴を並べたり、洗った足を座って拭いたりできるように長めのものを置く。
- ・ それぞれの幼児の遊びを学級全体で共有する機会を設け、互いの遊びや様子を知ったり、互いの気付きを共有したりする。
- ・ 穴を掘ることの満足感から水を流したいという次の遊びの目的になったことを受け止め、友達と目的の実現に向けて自分たちなりに試す姿を見守る。自分たちで乗り越えられる程度の困難かどうかを見極め、解決に向けたヒントになる言葉を掛けたり、具体的な手助けをしたりする。

④ 意図

- ・ 大きな穴を掘ったり、ダイナミックに水路をつくったりするなど一人ではできない遊びの楽しさや友達がいるからこそできる遊びの楽しさを味わってほしい。
- ・ 幼児のこれまでの関係性から、展開を予測し見守ることで、水を流すという目的の実現のために、自分たちなりの方法で試したり工夫したりしてほしい
- ・ 水がどこで漏れているか、原因は何かなどといった幼児が自分たちでは気付かないことを、自分たちで気付けるように可視化して援助することで、気付いた喜びを感じてほしい。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、省察する。）

- ・ 5歳児年長組になって使えるようになった遊具に興味をもって関わり、その遊具を使った遊びを探ったり、友達と一緒に使うことを楽しんだりしている。 自立心
- ・ じょうろやバケツなどの遊具を使って水を運ぶ姿から、最適な遊具を選択しており、これまでの水を汲む経験を生かし、一度で多量の水を汲むことができる遊具を選びとっている。 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ・ 水の性質を予想したり、方法を変化させることで結果を比較したりしている。 思考力の芽生え
- ・ 使い慣れた可動遊具を使って傾斜をつけて樋を並べ、水の流れと傾斜の関係性に気付き、発見の喜びを感じている。 思考力の芽生え
- ・ 気付いたことを友達に言葉で伝えた姿から、発見の喜びが友達に伝えたいという気持ちにつながり、自分の言葉で伝えている。 豊かな感性と表現
- ・ 友達の発言を受けたり友達の考えに触れたりしたことで、自分の考えを考え直したり、新たなことに気付いたりしている。 協同性
- ・ 水を多く流す前に裸足になる姿から、「濡れるだろう」と今後起きることを予測し、生活に必要なことを自分で判断している。 健康な心と体

- ・水路が壊れても何度も元に戻し、粘り強く遊ぶ姿から、友達と一緒に共通の目的に向かっていく連帯感が生まれ、失敗してもあきらめずに挑戦しようとする意欲が引き出されている。

協同性

- ・水が流れた喜びから、穴にたまった水の中に入ったり、学級全体の前で発表したりする姿が見られ、自分のしたいことに向かって十分に取り組んだ充実感や達成感、学級の友達に認めてもらう喜びを味わっている。

健康な心と体

⑥ 事例2をとおしてわかったこと（本事例の振り返りとⅡ期・Ⅲ期への見通し）

まず、教師の援助について考えてみます。

教師は、水路づくりに取り組む幼児の姿を見守るだけではなく、幼児の3、4歳時のこれまでの経験から、樋の並べ方を考えながら進めていく姿や水の流れと傾斜について気付いたりする幼児の姿を見て、幼児の気付きや行動の意味を周囲の幼児に知らせる援助を行っています。

そして、樋のつなぎ目から水が漏れてしまう場面では、幼児の気付きを促すような教材や環境の工夫を行っています。これらの援助により、幼児は水を流すという目的に向かって様々なことを考え、試行錯誤する姿につながったと考えられます。

また、幼児同士が気付きや発見を言葉にして表す姿を見守り、相手に伝わりやすいように要点を言葉にして伝えることで、幼児が友達の考えと自分の考えの違いに気付き、新たな考えを見つけていく姿を支えています。

次に、教材について考えてみます。

I期の時期には、「こうしてみたい」「やりたい」という幼児の思いの実現に向けて、遊びの中でじっくりと具体物と関わる時間や物との関わりが重要です。本事例のように、進級して新たに使用できるような遊具や用具、友達と一緒に使うと楽しい、十分に試行錯誤できるような教材を用意することで、水は上から下に流れること、水は重いという性質や樋の重ね方など、ものの仕組みなどの理解につながっています。

砂や水などは日常的に触れることができる環境となっていますが、遊びの中で幼児自らがものの性質に気付くことができるような具体物はどのように準備したらよいのか、きっかけやヒントを与えるタイミングをいつがよいのかなど、幼児の遊びの姿を予想して計画することが重要です。

身近にある具体物を遊びに取り入れて遊ぶ中で、本事例のような直接的な実感を伴った体験を得て理解することが、Ⅱ期やⅢ期での遊びや学習の場面での、物の性質や仕組みなどを感じとったり、気付いたり、考えたり、予想を立てたりする姿につながっていきます。

事例3 I期（5歳児6月）
花火のショーをしよう
—空気砲を使って—

事例を読み取る
キーワード

・自立心
・思考力の芽生え
・教材研究

<事例で伝えたいこと>

この事例では、空気砲を見て楽しかった体験を基に、自分たちでもつくってみたいと遊びに取り入れ、友達と目的の共有しながら、試行錯誤しながらも「こうしたい」というイメージの実現に向けて取り組むについて考えてみます。

① 事例の概要

A児は、親子遠足で港区立みなと科学館（以下「科学館」という）で、空気砲のサイエンスショーを見たことをきっかけに、幼稚園でペットボトルや段ボールを使い、空気砲をつくった。つくっているうちに、空気の穴が横向きでは、自分で段ボール箱をうまく扱えないことから、段ボール箱の穴を上向きにして置いた。そこから空気の勢いや音から花火をイメージし、友達と一緒に花火ごっこをすることを思いつく。豪華な花火のショーにするための準備し、花火ショーでは、お客さんから拍手を受け、嬉しそうにしていた。

② 具体的な遊びの様子

<1日目>

科学館の遠足翌日、サイエンスショーで体験した2種類の空気砲（ペットボトルと段ボール）で再現して遊べるように、ショーの中で紹介された材料を教師がいくつか遊戯室に用意しておく。A児は、登園後、自ら炭酸飲料のペットボトルを持参し、早速つくり始める。

ショーでのつくり方の説明を覚えていたA児は、教師に「ペットボトルを半分にしたい」と伝える。教師は「これは難しいから手伝うね」とA児の前でカッターでペットボトルを半分に切り、切れたペットボトルの両方をA児に渡す。教師は見本としてつくっておいたペットボトルの空気砲を見せながら「風船を被せるんだよね」と伝え、ビニールテープで止めるようA児に知らせたあと、他の幼児にペットボトルを切る作業を手伝った。A児は、自分で風船をペットボトルに被せるが、下半分のペットボトルに被せてしまい「あれ、間違えた」と笑う。あらためて上半分のペットボトルに風船を被せ「できた！」と音を鳴らして楽しむ。しばらく自分で「パン！」と鳴る音を聞いたり、友達に鳴らしてみせて驚かれたりしながら、繰り返し音を出して遊んでいた。

A児は、教師にも音を鳴らしに来て「クラッカーみたいだね」と言い、「本物のクラッカーは中から紙が出てくる」とつぶやく。そして、製作の材料置き場から折り紙を持ってきて、小さく丸めたり切ったりして空気砲に入れる。その後、空気砲を鳴らしてみると、中の紙が飛び出すことに気付く。飛び出した紙を拾い集めて再度、中に入れると、教師に「見て」と空気砲を見せた。教師が「びっくりした！本物のクラッカーみたい！」と驚くと、嬉しそうな表情をした。その後、

誕生日パーティーのイメージで、空気砲をクラッカーとして鳴らしたり、ケーキをつくったりして遊んだ。

< 2日目 >

A児は、段ボールの空気砲をつくり始めた。教師が広げて吊るしておいたビニールの的に、空気を当てて遊ぶことを何度か楽しんでいた。しばらくすると、ペットボトルの空気砲と同じように折り紙を小さく切り、段ボールの空気砲の中に入れる。段ボールの空気砲を撃ってみるが、ペットボトルのように中の紙が飛び出ない。A児は「先生、飛ばない…」と教師に言いに来る。教師は「本当だね。これだと飛ぶんだけどね」とサイエンスショーで飛ばしていた細く割いたスズランテープを提示する。

A児は、空気砲の穴に教師からもらったスズランテープを乗せて飛ばそうとするが、ショーで見たように段ボールを脇に抱えて横向きにしたままスズランテープを乗せようとするため、スズランテープが落ちてしまう。教師が「段ボールを置いてからスズランテープを掛けてみたら？」と声を掛けると、段ボールを床に置き、穴にスズランテープを掛けてから段ボールを持って横に向き、空気を出すという動きがスムーズにできるようになった。繰り返す中でスズランテープが落ちないように長めに穴に掛けたり、スズランテープの太さを変えたりするA児の様子を見ながら、教師は「長い方が（穴に）乗せられるね」「太い方がいいのかな？」など声を掛ける。

そのうち、A児は近くにあったカラービニールを穴の上に置き空気砲を叩くと、カラービニールが上に飛ぶことに気付いた。それを見て教師が「すごい、飛んだね！」と共感すると、様々なサイズのカラービニールを穴に乗せて試して遊ぶ。すると、段ボールの空気砲の穴の上にカラービニールを置き、その上に折り紙を小さく切って乗せることを思いつく。

近くにいたB児は、自分のつくった段ボールの空気砲で空き箱を的にして遊んでいたが、A児のしていることに気付く。B児も同じようにカラービニールと小さく切った折り紙を空気砲の穴の上に乗せて遊び始めると、A児に「順番にやろう。私がやった後にAちゃんやって」と声を掛ける。A児は「いいね」と返事をして、順番にカラービニールと折り紙を飛ばして、拾い集めてまた順番に飛ばすことを繰り返し遊ぶ。

しばらくすると、B児は「叩きにくい」と言って、ゲームボックスを持ってきてゲームボックスの上に空気砲を置き、同じように飛ばして遊ぶ。「も～、Aちゃんも運んでよ」と言いながら、A児の分のゲームボックスも持って来る。二人で同じように遊ぶ中で「花火みたい！」とA児が言うと、B児が「一緒に飛ばした方がもっと花火みたいになるかも」と言い、二人で一緒に「3・2・1」と声を合わせて飛ばす。教師が「きれいだね、面白いね！」と声を掛ける。

片付けの時間になり、教師が、片付け前に「今日の遊び紹介」としてA児とB児の遊びを学級全体に紹介する。A児とB児が花火を披露すると、他児は床に座って見ながら、拍手をしたり、「すごい」「きれい」と歓声を上げたりした。二人は嬉しそうな表情になり、B児が「さくら組（4歳児）とか、お家の人にも見せたい」と言うと、A児は「花火をもっと豪華にしたい」と言う。

<3日目>

A児は折り紙や、教師が用意していた金と銀の紙テープなどを切り、花火として飛ばす紙を増やす。B児はゲームボックスを出して花火を設置したり、お客さんが見られるように椅子を用意したりして遊び出す。B児は、空き箱を的にする空気砲の遊びの場も作る。その後、近くでプラネタリウムごっこをしていた幼児がさくら組を呼びに行き、さくら組も加わって一緒に遊ぶ。

A児とB児はさくら組にまずは空気砲の的あてを案内し、やり方を知らせたり、空き箱が倒れると拍手したりしながら、やり取りを楽しむ。しばらくして、B児が「花火が始まりま〜す」と知らせ、A児と花火の場に移動する。座れないお客さんの分の椅子を足したり、複数作った段ボールの空気砲の1つをくじ引き箱に見立ててくじ引きをさせてあげたりする。B児は「当たりは座って見られます、はずれは立ち見です」と言いながら対応する。お客さんの見る準備ができると、二人で嬉しそうに「3・2・1」と言いながら空気砲を発射し、大歓声と拍手を受ける。

③ 環境の構成

- ・ 幼児が材料を選んで使えるように、段ボールやペットボトルなど、大小の大きさや色が異なるものを数種類、用意した。
- ・ 花火のイメージがより際立つように、金銀のテープやミラーテープなどを用意した。

④ 意図

- ・ うまくいかない場合はやり直したり、やり直すことでうまくいったりすることが体験できるように、段ボールの組み立てや穴の位置、大きさについては幼児の取組を見守りつつ、自分で乗り越えられるように個々の幼児の力量に応じて手助けをした。
- ・ 他の幼児にもA児やB児の発見の面白さが伝わったり、友達のよさに気付いたりする機会になるように、学級全体で遊びを共有した。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で省察する。）

- ・ A児は家からペットボトルを持参し、自分で空気砲をつくろうとしている。箱から飛び出てくる風の勢いその音を目の前で直接見たり聞いたりしたことは、A児にとって驚きや不思議さを感じる体験となった。サイエンスショーの体験や教師の示した見本を見ながら「あの空気砲なら自分にもできそうだ」という期待感があった。だからこそ、A児は自分もやってみたいと意欲がわいていたと思われる。 自立心
- ・ 最初は、個々に空気砲をつくっていたので、「順番に」空気砲を試していたが、同じ場で互に見合える場となったことによって、友達と「一緒に」試すという遊びの目的が生まれている。 協同性
- ・ 空気砲を床に置くと叩きにくいことに気付き、高さを出すために、B児は自分の分のゲームボックスだけでなく、A児の分も運んでくる姿は、「一緒に」に遊んでいるという仲間としての気持ちが現われている。 協同性
- ・ 同じ現象を見て「花火みたい」と共有し、二人で声を合わせて空気砲を飛ばしているうちに楽しさを共有している。 協同性

- ・ 空気砲をつくって遊ぶ際に、ハサミや段ボールカッターなどの道具を使う、自分なりに対象物を決めて空気を発射して遊ぶなど、安全に遊び、自分で状況を考えてふさわしい遊び方をしている。道徳性・規範意識の芽生え

- ・ 本物のクラッカーのようになるように、中に入れる紙の素材や大きさを自分なりに考えて繰り返し試している。思考力の芽生え

- ・ 「どうやったら紙が飛び出るか」と試したり、偶然発見したカラービニールが飛ぶという事象から新たなイメージがわき、遊びを思い付いたりしている。思考力の芽生え

- ・ 科学館のスタッフがしていた段ボール箱を横に抱えるやり方では、空気砲はうまくいかないの
で、自分なりにどのように段ボール箱を持ったり置いたりしたらよいか考えている。思考力の芽生え

- ・ 個々の遊びから、しだいに二人での遊びに変化していく過程でのやりとりのほか、「豪華」という言葉のイメージは、「クラッカー」ではなく「花火」を想起しており、また、「豪華」の意味は、「きらきらするもの」として金銀のテープを選ぶなど、言葉に合った素材を選んでいることから、幼児なりにその意味を理解していることがわかる。言葉による伝え合い

- ・ 段ボール箱で作った空気砲とペットボトルで作った空気砲では、大きさや形が異なると、その勢いや音が異なること、また、空気砲で飛ばすものについても、穴の位置、紙の量や長さによって異なることなどの感覚を、実体験を通してつかんでいる。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

- ・ 空気砲の音と勢いを「花火」のように感じて、「花火を豪華にしたい」という思いで、キラキラテープを選ぶなど、こだわって素材を選んでいる。豊かな感性と表現

⑥ 事例3をとおしてわかったこと（本事例の振り返りとⅡ期、Ⅲ期への見通し）

まず、教師の援助について振り返ってみます。

この事例は、遠足で空気砲のショーを見た体験を園で再現しようという幼児の思いから始まりました。

空気砲をつくる過程では、幼児は、勢いよく空気を飛ばすために、段ボール箱で作った空気砲とペットボトルで作った空気砲では、大きさや形が異なるとその勢いや音が異なること、また、空気砲で飛ばすものについても、穴の位置、紙の量や長さによって異なることなどの感覚を、実体験を通してつかんでいることがわかります。

また、幼児は、空気砲の穴が横向きでは、空気砲はうまくいかず、自分なりにどのように段ボール箱を持ったり置いたりしたらよいか考えていました。そのうち、幼児自身が空気砲を床に置くと叩きにくいことに気付き、高さを工夫するなどの様子が見られています。

このときの教師の援助を考えてみます。

すぐに教師がヒントを出してしまっては十分な試行錯誤はできませんし、思い通りにいかないままでは、興味は持続せずうまうまかなかった体験だけが残ってしまうかもしれません。幼児が自ら気付けるように、教師はヒントを出すタイミングを捉えて関与することが重要となってきます。そのため、教師は、事前に材料の特性や幼児の発達特性を理解した上で、幼児に体験してほしいことを見通して、幼児が扱いやすい材料や試行錯誤しやすい材料など、教育的価値のある

材料となるよう教材研究をして、幼児の成功体験につながるようにすることが重要です。

つぎに、5歳児の遊びについて振り返ってみます。

この遊びは、単なる空気砲をつくることで終わりではなく、空気の力によってものが飛ぶ、その様子を「花火」に見立てることによって、花火のショーへと変わっていききました。幼児から出てきた発想で「花火」のイメージが加わったことで、幼児同士の遊びの目的は、空気でものを飛ばすことから花火のショーをすることに、そして、花火を人に見せるという目的へと次第に変わっていき、自分たちの遊びへと発展していききました。幼児の知的好奇心をくすぐるような仕掛けがあることで、少し難しいことにも挑戦し、また、「花火」をイメージした姿からは、幼児のこれまでの日常生活で体験した「花火」とも結び付いて、仕掛けを生かした遊びを実現しています。

下学年にショーを見てもらい、「友達が喜んでくれた」という充実感や満足感を味わう体験もでき、このような「友達と一緒にやったらできた」「友達と一緒にだと楽しかった」などの経験が基礎となり、Ⅱ期やⅢ期には、友達と一緒にやってみよう、あきらめずに挑戦してみようという遊びや学習の意欲やつながるのではないかと考えます。

事例4 II期（5歳児11月～12月）

みんなでやればいいんじゃない？

—劇づくりの話し合いへとつながるプロセス—

事例を読み取る
キーワード

・言葉による
伝え合い
・思考力の芽生え
・協同性

<事例で伝えたいこと>

この事例では、5歳児の話し合いの場面を取り上げ、最初は少人数での言葉の伝え合いから、次第に学級全体の場面での話し合いが可能になっていくプロセスを追い、幼児の姿について理解を深めます。

【エピソード1「案内図をつくろうー相手の考えを受け止める経験ー」（11月）】

① 事例の概要

遠足で行った遊園地での楽しかった経験から、気に入っている「お化け」のイメージをかけ合わせて3人の幼児たちは、「お化け遊園地」をつくった。自分たちだけでなく、「たくさんの人に遊びにきてほしい」という思いを受けて、誰もが思わず訪れたくなるような仕掛けとして、案内図があったらいいという話から、3人は、案内図について考え始めた。

ー5歳児3名の関係性や実態についてー

A児とB児は、2年保育で入園当初から在籍していた幼児である。A児は、活発で、4歳時から集団の中心にいるような幼児である。B児は、A児の言葉を聞いて動くことがほとんどで、言葉で思いを出すことはあまりなかった。

少人数学級のため、一緒に過ごすことが多かった二人である。そこに、5歳時の9月にC児が転入した。C児は、遊びの中でA児やB児に関わることは少なかったが、お化け屋敷づくりをとおして、少しずつ友達への意識をもち始めてきたところであった。

② 具体的な活動の様子

プレイルームには、積み木などでつくり進めてきた汽車と線路、お化けと雷、トンネルができあがっている。3人の幼児は、自分たちがつくった「お化け遊園地」の中央に机を置き、案内図について話し合いを始めた。そこに教師も加わることにした。

教師 ポスターには何をかいたらいいかな。

A児 汽車と線路があったらいい。

C児 僕はお化けがいい。あと、雷もかくっていいのはどう？

（黙ったままのB児を見て）教師 B君にも聞いてみたら？

A児 B君は何がいい？

B児 （小さい声で）どうくつ。
 C児 え？どうぶつ？
 B児 違う！！どうくつ！！
 教師 （理解していない表情のA児とC児を見て、実際の間を指さしながら）
 B君、『どうくつ』ってこの中のどれのことだろう？
 B児 （トンネルを指さし）これ。
 C児 これ『トンネル』だよ。
 B児 でも『どうくつ』がいい。
 教師 どうして『どうくつ』がいいと思うの？
 B児 だって、『どうくつ』の方が怖い感じがするから。
 教師 なるほど。B君は『トンネル』より『どうくつ』の方が怖そうって思うのか。
 Aちゃん、C君はどう？2人とも『どうくつ』ってわかる？
 （反応があまりない）
 教師 「洞窟」って真っ暗なんだよね。『トンネル』は遠足のバスでも通ったけど、
 『どうくつ』は先生も入ったことないな。探検とかのお話に出てくるよね。
 C児 うーん、ちょっと知ってるけど…確かに『トンネル』より怖そうかも！
 A児 えー、嫌だ・・・。
 教師 Aちゃんは『トンネル』のままだいいんだ。どうして『どうくつ』は嫌だと思
 うの？
 A児 だって、みんな入ったことないと思うから。
 B児 1回くらい入らせてあげればいいじゃん！
 教師 B君は、今までやったことのないことをやらせてあげたら、楽しいって思うの
 かな？
 B児 そう。
 A児 （少し考えて）じゃあ、いいよ。
 教師 じゃあ、今からこの場所は『どうくつ』だね。小さい組はわかるかな？
 B児 『どうくつ』だって、教えてあげよう。

その後、『お化け遊園地』のポスターの絵を分担してかいた。

③ 環境の構成

- ・お化けや電車など、遊びのイメージがわくような絵本を読んだり、読んだ絵本は、幼児が繰り返し楽しんだりできるように保育室の一角に置いておいた。
- ・3人が「案内図をかく」という目的を共有し、一人ひとりが自分なりの考えをもって話し合いに参加できるように、幼児たちがつくった「お化け遊園地」が目に入る場で、話し合いを行うようにした。

④ 意図

- ・B児はこれまで、A児にリードされ、A児の考えや思いにそって動くことが多かったが、9月

末の運動会の経験を得て自信をつけてきたところであった。A児と同じではない「自分なりの考え」をもち、それを伝えようとしているよう様子が遊びの中で出てきていた。そのため、B児が友達に考えを伝え、受け止められた喜びを感じられるよう、教師は、言葉にならない思いを引き出す、補足する、よりよい伝え方をして見せるなどの援助をした。

- ・ A児は、入園当初から、主張したことは受け止められ、考えを取り入れられることがほとんどであった。自分とは異なる考えや思いをもち、それを主張する友達と対等に話し合う経験は少なく、自分の思いがすぐに通らないとわかると、不服そうな表情で黙ってしまうことが多かった。そこでA児には、異なる考えの相手と案を出し合い、話し合いを進めていけるような道筋を示しながら、A児もB児も納得できるようにしたいと考えた。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・ 意見を聞かれたときに、「〇〇だから△△がいい」という自分の考えや理由をもって、それを相手に伝えている。思考力の芽生え 言葉による伝え合い
- ・ 自分にはない友達の考えを聞き、それについて自分なりに考えた上で、よさに気づき、認めようとしている。協同性 思考力の芽生え
- ・ 自分とは異なる友達の考えを聞き、理解した上で、それに対して自分の思うことを伝えようとしている。協同性 思考力の芽生え 言葉による伝え合い
- ・ これまで聞き知ってきた言葉の中から、自分のイメージに合うものを探し、表現しようとしている。豊かな感性と表現 社会生活との関わり
- ・ 「洞窟」の実物は目の前にないが、教師の話や言葉の響きから想像し、イメージを広げている。豊かな感性と表現 言葉による伝え合い
- ・ 自分の主張が通らないことがあっても、「案内図をつくる」という目的に向けて、話し合っ
てなんとかしようとしている。自立心 協同性
- ・ 年長児としてみんなで行う課題活動に張り切り、自分なりの考えをもって、共通の目的に向
かって取組んでいこうとしている。協同性 自立心

【エピソード2「おはなしをつくってお客さんに見せたい

－自分の考えも伝え、互いの考えを受け止め合う経験－(12月)】

① 事例の概要

学級の幼児たちは、5歳児に進級して以降、誕生会などのみんなが集まる場で、お話を簡単な劇遊びにして見せることが好きで何度か経験してきている。

12月に入り、遊びの中でクリスマスごっこが始まった。遊んでいくうちにイメージが広がっていき、必要な道具をつくるなどして、遊びが続いた。ある日、これまでの経験を生かし、教師の投げ掛けをきっかけに「〇〇組のみんなでやればいいんじゃない？」という気持ちが出てきた。12月末には発表会を控えており、みんなでどのようなお話の劇にするかを話し合うことになった。

② 具体的な遊びの様子

<場面1>

休みの日に家族で外出してショーなどを見たことなどを話題にしながら、幼児たちはサンタクロースやトナカイになって遊んでいる。

A児 サンタさんの誕生日パーティーがあるってことにしようよ。

B児 そうだね。じゃ、トナカイがサプライズするってことはどう？

A児 サプライズ？いいね。

C児 私はプリンセスになりたい、プリンセスもお誕生日パーティーに行くってことでいい？

A児・B児 いいよ。

C児 先生、プリンセスのドレス、つくる。(少し考えて) ピンクのビニール袋でつくろう。

B児 トナカイは、足が欲しいな。

A児 サンタさんと言ったら、ひげだね。

B児・C児 その綿、いいね。本当のひげみたい。

それぞれが、必要なものを製作コーナーから選んでつくり、身に着けたりして遊んでいる。

<場面2>

その後、D児、E児も仲間に加わって遊び、寝てプレゼントを待つふりをするなどの動きを楽しんだり、プレゼントやケーキなど必要なものをつくったりしていた。

教師 サンタさんのお誕生日パーティーをしているんだね。

B児 そうだよ。サンタさんには内緒でケーキの準備したんだよ。

教師 まあ、おいしそうなケーキ。トナカイさんとプリンセスが準備したの？

C児 そう！

教師 プリンセスって、ケーキをつくるのが得意なのね。知らなかったわあ。

A児 そうだよ。

教師 楽しそう。なんだか、これ、また、面白そうなお話になっちゃいそう。

B児 どういうこと？

教師 あ、ひみつ。なんでもないよ。

C児 なーに？教えて。先生だけの秘密はずるい。

(幼児が「ずるい」「教えて」と言い出す)

教師 うーん。あのね、みんな楽しそうだから、楽しそうなお話ができそうだなと思ったの。

C児 えー！ 恥ずかしい。(そう言いながら 嬉しそうにする)

教師は、その日の帰りの会で、A児たちの遊びについて話題にした。

教師 Aちゃんたちの遊びを見ていたら、お客さんに見せなくなっちゃった。

幼児 見たい！見せて！

教師 見たいよね。・・・(少し、考えて) そうだ、今度、発表会っていうのがあるんだけど。

教師 Aちゃんたちのお話を劇にしたら？そしたら見られるよ。

幼児 えー！ Aちゃんたちだけ、ずるいよ。やりたいよね・・・

教師 みんなでお話つくるってことはどう？

誕生会のときに、やってみたいにやるっていうのは？

C児 そうだ、いいこと考えた、〇〇組でやればいいんじゃない？やろう、やろう。

幼児たちの気持ちが学級のみinnなでのお話づくりに向いた。

<場面3>

学級のみinnなであらすじを考えるため、教師は幼児の考えをホワイトボードに書いていった。

教師 サンタさんとトナカイさん、プリンセスも出てくるのね。他にやりたい役はある？

F児 コウモリ！

教師 コウモリだって。なるほど。いいね。

教師は、「さんた、となかひ、ぷりんせす、こうもり」とホワイトボードに書き、絵も添えた。

教師 どんなお話にする？ 楽しいとか怖いとか、スリルまんてんとか、悲しい話です・・・とか。

A児 楽しい話で、ハッピーな感じがいい。

B児 ちょっと怖い感じがいい。

C児 楽しいだけだとつまらないから、ちょっと怖いところがあるといいよね！

教師 なるほど。Aちゃんたちが遊んでいたときは、トナカイさんとプリンセスがサプライズでサンタさんにお誕生日パーティーをしてあげるっていうお話だったんだよね。それは、どうする？このお話は、お誕生日パーティーをするという考えは、いいのかな？

A児 いいよ。だって、本当は、サンタさんがプレゼントを渡すんだけど、このお話は、〇〇組だから、サンタさんがもらう。

教師 みんなは、それでいいのかな？

(幼児はみんな納得する)

教師はホワイトボードに「誕生日パーティーでサンタがプレゼントをもらう」と書いた。

教師 サンタさんにどうやって気付かれないようにできるかな。

G児 サンタさんが寝ている間に準備するのは？

教師 面白いね。みんなはどう？

全員 いいね。

教師 ホワイトボードにサンタが寝ている絵をかき、「ねているあいだにじゅんぴ」と書いた。
お誕生日パーティーの準備はどうやってしようか。

C児 みんなでケーキをつくりたい。

教師 どうやって？

H児 みんなで材料を持ってくるのは？

教師 ケーキに必要な材料っていうこと？

H児 そう！卵とか牛乳とか。

教師 みんなC児とH児の考え、どうかな？

全員 いいよ。

教師 パーティーの準備をするところが決まってきたね。ところで、楽しいお話だけど、少し怖いところもあったほうがいいって言っていたよね？

どんなことがあるといいかな？

幼児たちがいろいろなことを言い始める

幼児 そうだ、コウモリが、ケーキを食べちゃうとか。

幼児 ケーキを届けている途中でオオカミが出てくる。

幼児 オオカミに食べられそうになる。ガー！（オオカミが食べるまねをする）

幼児 オオカミは出てこないよ。

幼児 ケーキの中に毒が入っているのは？

幼児 それはだめだよ。

幼児 ちゃんと考えて。

幼児 じゃあ、コウモリが何か、いたずらしちゃうっていうのは？

幼児 いいね。羽を使って風を起こしてケーキの材料を吹き飛ばしちゃうとか？

教師 どうしてコウモリは、いたずらしちゃうの？（少し考える）

幼児 パーティーに呼ばれてなくて怒っちゃうっていうのは？

幼児 それ、いいよ！パーティーにコウモリだけ呼ばれなかったから、怒っていたずらしちゃう！たとえば、ケーキがつかれないようにするとか…。

教師 ケーキがつかれないようにいたずらするのね。確かに、楽しいだけのお話ではなくて、大変なことも起きちゃうのは面白いそうだね。

教師 ほかにもあるかもしれないね。「ちょっと怖い」部分は、もう少しみんなで考えてみようか。〇〇組だけのお話だね。

その後、教師は、幼児から出てくる考えを聞き、幼児とともに話のイメージを確認して共有しながら、あらすじを組み立てて、発表会に向けての劇づくりを進めた。

③ 環境の構成

- ・日常的に、幼児の「やりたい」という遊びのイメージを実現し、目的に応じたものをつくることができるよう、自分で選んで使えるような材料や遊具を準備したり提示したりする。
- ・協同して遊びを進められる幼児同士の関係性を大事にしながら、学級全体の活動に主体的に取り組んでいけるようなきっかけをつくっていく。
- ・一人ひとりの考えをじっくりと聞き、幼児のやりたい気持ちを実現できるように、話の論点がずれないように内容を整理する。あらすじや何の役が出てくるのかなど、ホワイトボードでの文字表記に加えてイラストなどで、全ての幼児が理解し納得して進められるようにする。
- ・一人ひとりの考えを生かしていくため、話し合いの時間を十分に確保する。
- ・考えたことが、他の幼児にも伝わるよう「どうやってつくるのかな？」「こういうことかな？」

と言葉を補足したり、わかりやすい言葉に言い換えたりして、受容的な構えで聞き、温かい雰囲気大切にします。

④ 意図

- ・話し合いの際には、イメージを共有できるように、黒板やホワイトボードなどに、文字とともにイラストでも示す。(全ての幼児がわかるよう、文字のみに偏らないよう配慮する)
- ・日頃、遊びの中で楽しんでいることを基盤にして、自分の考えをありのままに出したり、互いの考えを受け止め合ったり、受け入れ合ったりしながら話し合いを進めてほしい。

⑤ 幼児に育っている力(「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で省察する)

- ・思いや考えを伝え合い、受け入れ合ったりしながら、学級のみなでお話をつくり上げていくことを楽しんでいる。協同性
- ・自分のイメージを言葉で相手に伝え、考えが相手に伝わる喜びや受け入れられるうれしさを感じている。言葉による伝え合い
- ・教師がホワイトボードに書く文字を、自分や友達の言葉に対応するものとして結び付けて見ている。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ・教師がホワイトボードに書き記す様子から、自分の考えを相手に伝えるための手段を学んでいる。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

⑥ 事例4をとおしてわかったこと(Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り)

この事例は、幼児が友達と考えを出し合い、共通の目的に向かって取り組む様子を追ったものです。担任は、幼児が自分の考えを伝え、受け止められる喜びや、友達と一緒に取組を進めていく楽しさ、充実感が味わえるよう、時期に応じて活動の内容を考え、援助を行っています。

エピソード1に出てくるB児は、それまで、自分の意見をあまり表に出さず、グループ活動の参加に消極的でした。教師は、そのようなB児の実態を考え、相談する内容を具体的なものにし、実際に目の前にあるものから選択することで意見をもてるようにしています。また、B児の考えが他の二人に伝わるよう、B児が言葉で表現しきれなかった部分を引き出し、言葉で表すようにしています。その結果、B児は自分の考えを友達に伝え、それが受け止められる喜びを経験することができました。

エピソード2においては、学級の多くの幼児が、「体験をもとにしたお話づくり」という目的に向かって積極的に話し合いに参加しています。自分の考えを伝えるだけでなく、友達の言葉からその考えのよさに気づき、受け止める姿が見られています。これは、エピソード1でも見られたように、幼児が感じた喜びを、一人ひとりが積み重ねてきたことによるものであると考えます。

教師は、このように意欲をもった幼児たちが、これまでの経験を基に、自分たちでお話を創造するという目的に向かって、お話づくりに必要な話し合いを積み重ねていけるよう、話し合う内容を整理したり、次に話し合うことが必要な内容に気付くきっかけとなる言葉を掛けたりしています。そして、話し合った内容を、みんなで共有しやすいよう、文字にイラストを添えて残すなどの援助を行っています。また、「〇〇組のみんなのおはなし」「〇〇組だけのおはなし」と何度も言葉にして表しています。このことにより、幼児は学級のみなで行う特別感のある活動であ

ることを意識するとともに、自分たちだけでする楽しさや意欲、充実感をより味わうことができます。

ここで、事例につながるⅠ期を振り返ります。事例にあるように、共通の目的に向かって友達と考えを伝え合い、取り組むようになるためには、まず幼児一人ひとりが安心して思いを出せるようにしていくことが大切です。まずは教師自身が温かいまなざしと受け止めで、自分を表現しやすい雰囲気づくりを意識します。Ⅰ期においても、2～4人ほどの小グループでの活動を意識的に取り入れていきます。その際、最初は、普段から比較的、関わりの多い幼児同士と一緒に取り組めるよう配慮します。そうすることで、気持ちを合わせる心地よさを味わうことにつながるからです。

相談する内容も、例えば「グー、チョキ、パーの3種類の中から1種類を選ぶ」、「それぞれがよいと考える模様を持ち寄り、一つのこいのぼりをつくる」など、意見をもちやすく、受け止めやすい内容にします。そうすることで、自分の考えを伝え、受け止められた喜びや、友達と気持ちを合わせて取り組む楽しさを積み重ねていくことができるようにしていきます。

最後に、このようにしてⅡ期に積み重ねられた経験が、Ⅲ期にどのようにつながっていくかを考えます。学級のみんなで考えや力を出し合い、取り組んでいく過程で感じた楽しさややり遂げた後の満足感、充実感は、Ⅲ期においても、一人ひとりが力を発揮しながら「みんなで」学習に取り組もうとする姿勢につながっていくと考えます。友達と思いを出し合う中で、児童自らが課題を見付けていけるよう、また、言葉による説明から状況をイメージし、活動の目的を理解したり、目的の実現に向けて考えたりすることができるよう、実態に応じた教師の援助が必要となってくると考えられます。

事例5 II期（5歳児1月）

僕が幼虫のお世話をしたい—当番の仕事—

事例を読み取る
キーワード

・意欲
・必要感

<事例で伝えたいこと>

この事例では、最初は、幼児の「やりたい」という意欲から、「やりたい」ことを当番としてはじめ、当番の仕事が、「しなければならない」という必要感をもって取り組むようになるためには、どうしたらよいのかについて考えてみます。

① 事例の概要

夏から飼育してきたカブトムシが卵を産み、幼虫となった。成虫になるとときには興味をもち、餌やりをしてきたが、幼虫になってからはあまり気にする幼児がいなかった。

昆虫が好きなA児は、毎日、飼育ケースの様子を気にしていた。A児が始めた水やりがきっかけで「ぼくもやりたい」という輪が広がった。たくさんの幼児がお世話をするようになったが、水をあげすぎで土がびしょびしょになってしまい、このままでは幼虫が死んでしまう。みんなの「お世話したい」という気持ちを叶えるために、クラスで話し合いをすることにした。

② 具体的な遊びの様子

夏にクラスで飼育していたカブトムシが卵を産み、卵から幼虫となった。

カブトムシとして成虫の頃は、エサをあげたり、掃除をしたり、世話をする幼児がいたが、幼虫になってからは気にする幼児が減り、11月ごろまで保育者が、幼児がいない時間に霧吹きで水をあげていた。

毎日、飼育ケースの中の幼虫の様子を気にしていたA児は、乾いた土を見ていた。

- | | |
|-----|--|
| A児 | 先生、カブトムシの幼虫って土が乾いていたら、大きくなれないって。ぼくがお世話をするから水をあげたい。 |
| 保育士 | 気が付いてくれてありがとう。じゃあA君がお水あげてくれるかな？ |
| A児 | うん。毎日あげるね。 |
| B児 | （A児の姿を見て）ぼくもカブトムシに水をあげたい。 |
| C児 | 次は僕があげるね。数人が霧吹きで水をあげる。 |
| A児 | あーあ。びしょびしょになっちゃった。かわいそう。たぶん死んじゃうよ。 |
| B児 | でもAばかりずるいよ。 |
| D児 | でもみんなやりたいよね。先生に聞いてみよう。 |
| 保育士 | みんなはどうしたい？ |
| D児 | みんなのカブトムシだからちゃんと話して決めよう。 |
| | 先生、帰りの会でみんなで相談してもいいかな？ |
| 保育士 | じゃあ今日の帰りの会に話そうね。 |

その日の帰りの会で、クラスで相談することとなった。

保育士は、「みんな、やりたいよね」と問いかけると、幼児たちは口々に「やりたい」と言う。

A児　でも水をあげすぎたら幼虫は死んじゃうよ。

B児・D児　じゃあみんなで交代でやるのはどう？

A児　でもカブトムシとか虫が嫌いな子はどうするの？

C児　やりたい子がやればいいじゃん。

D児　それじゃあやりたくない子はずるいじゃん。みんなのカブトムシなのに。グループでやるのはどう？掃除の当番みたいに。

B児　僕は虫が好きだから、怖い子がいたら手伝ってあげるよ。

全員　それがいいね！

保育士　先生が手伝わなくてもグループならみんなでできるかな？

A児　子どもたちだけでできるよ！

その後、カブトムシの幼虫の水やりは、食後に行うことになり、4名ほどのグループで行う当番活動となった。当初、虫が苦手でやりたがらない幼児もいたが、「僕がケースの蓋を開けるから〇〇ちゃんは水をあげて」と、同じグループの友達が飼育ケースの蓋を開けてあげることで、一緒に行うことができた。当番を忘れて遊ぶ幼児もいたが、同じグループの幼児が「遊ぶ前にカブトムシのお世話をするよ」「ちゃんとお世話しないと死んじゃうんだよ」と声を掛け合って行うなど、3月の卒園まで世話をしていた。

③ 環境の構成

- ・水やり用の霧吹きを用意し、いつでも水やりができるようにしていた。
- ・昆虫図鑑や生き物の飼育の本を普段から保育室に用意し、自分で調べる環境をつくった。
- ・帰りの会で、「みんなで相談したいこと」として時間を設け、発言し、みんなで話し合う機会を普段からつくっていた。
- ・幼児が気付いたこと、やりたいこと、必要と感じたことを当番活動として行っていくようにしてきた。

④ 意図

- ・生き物の生態に興味をもち、命の大切さに気が付いてほしい。
- ・やりたい、お世話したい幼児がたくさんいる中で、どうしたらみんなで協力して世話ができるかを考えてほしい。
- ・自分の意見を言ったり、人の意見を聞いたりしてほしい。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、省察する）

- ・カブトムシの生態に興味を持ち、幼虫のときに飼育するためには何が必要かを考え、図鑑で調べようとする。土はどれくらいで乾くか、水やりの頻度はどれくらいに気付く。

自然との関わり、生命尊重

・どのようにしたらみんなが世話をできるかをクラスで話し合い、自分の意見を言葉で伝えたり、相手の意見を受け入れたりする。みんなが納得できる方法を考える。 言葉による伝え合い

・同じグループのメンバーと水やりの順番やどの飼育ケースにやるか、役割を相談して決める。 協同性

・自分の役割に必要感を感じ、当番に期待をもって、最後までやろうとする。

社会生活との関わり

⑥ 事例5をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

まず、「当番活動」につながる経験と「話すこと・聞くこと」についての経験の積み重ねについて考えてみます。

春には園庭や近隣の公園で、幼児が、アゲハチョウ、バッタ、カマキリ、ヤゴなどの捕まえた昆虫を「飼いたい」という思いがあり、その思いを保育士は受け止め、捕まえては飼育ケースで飼育するという経験を重ねてきました。カブトムシの飼育が始まる前は、生き物を飼育するためには世話をすることが必要であり、自分たちで世話をする約束しましたが、飼育の仕方や餌が分からなかったり、捕まえたことに満足して世話をしなかったりしたことで生き物が死んでしまうことがありました。

しだいに飼育の仕方や生態、餌などを自ら図鑑で調べようとする幼児が増え、バッタのために毎日園庭の草を取りに行く、ヤゴのために水を替えるなど、必要な方法に気付き、自分たちで世話をしようとする姿が見られるようになりました。はじめはうまくいかずに、生き物が死んでしまうことがありましたが、生き物の死を経験したことで、必要な手立てを考え、調べるような姿が増え、今回のカブトムシの飼育や、当番活動につながりました。

次に「話すこと・聞くこと」の経験の積み重ねです。

進級してから、毎日、帰りの会で、「今日、楽しかったこと」をテーマにみんなの前で話したり、4人程度の少人数グループで話し合ったりするなど、自分の考えを人前で話をする機会をつくってきました。単に「話を聞くこと」を求めるのではなく、友達の話を知りたくなるようなテーマや、それについてまた話したくなるような雰囲気づくりなどを心掛け、保育士も一緒に興味や関心を持ち、疑問を投げ掛けたり、不思議に思ったりする姿勢を示してきました。その結果、今回の「カブトムシの当番活動」の話題では、「自分の意見を話す」「他児の意見を聞く」などの姿につながったと考えられます。

前述のような経験から、Ⅲ期への見通しについて考えてみます。

この当番は、A児が必要感を感じて幼虫への水やりを始めました。ところが、全員の幼児がカブトムシの幼虫に水やりをしたいという気持ちが見られました。そこで、保育士は、「やりたい」という気持ちを十分に受け止めたうえで、水やりをどのように進めたらよいかについて、保育士がすぐに解決方法を決めるのではなく、幼児同士による話し合いをとおして決めることにしました。前述のように、クラス（学級）みんなでの話し合いでは、それぞれが自分なりの考えを持ち、意見を言ったり、友達の意見を受け入れたりして、数人のグループによる当番活動として水やりをすることに決まりました。

幼児たちが必要だと思ったことや考えたことに対して、大人がすぐに解決方法や答えを伝えるのではなく、どのような方法がよいのかを自分なりに考えたり、みんなで相談したりしながら試す経験が、幼児の主体性を伸ばすうえで大切な関わりだと感じました。

自分たちが気付いたこと、やりたいこと、必要なことなどをどのように生活の中に取り入れて行うのか、日常的に話し合う機会をもつようにして、学級での話し合いの結果、自分たちの生活が心地よく過ごせるようになっていたり、友達とのつながりがもてたりするなど、話し合いで決めていくよさを実感できるようにすることも大切だと思います。

話し合いの過程では、人前で話すことが苦手な幼児もいます。無理に意見を言わせるのではなく、どの幼児にも温かなまなざしを向け、「聞いているよ」という雰囲気づくりをすることが重要です。そこで、最初は、誰もが話し合いに参加しやすい簡単なテーマを選び、選択肢を用意して、意見を表明する場面をつくり、誰もが参加しているという実感をもてるようにします。会を重ねる中で、それぞれの表情や話し合いの参加の仕方などをよく見て、自分の考えを出さない、考えをもっていない幼児には、一つの意見に対して「〇〇さんはどう思うかな？」と意見を引き出したり、「明日、みんなが困っていた〇〇の話について考えようと思う。どんなことをしたいか、考えてきてね」と事前に話しておいたりします。

幼児が人前で話すときは、「聞いているよ」という温かなまなざしとともに、「なるほど」とうなずきながら聞いたり、ときには保育士が質問を投げ掛けたりして、「自分の意見をみんなが聞いてくれている」という成功体験が自信につながるように援助することが大切です。

幼児期に体験したことや小さな成功経験を積み重ねたことによる自信が、Ⅲ期の意欲的な姿や小学校入学に向けて期待をもつ姿につながると考えます。

事例6 II期（5歳児2月）

氷をつくりたいー氷の実験ー

事例を読み取る
キーワード

・意欲
・思考力
・試行錯誤

<事例で伝えたいこと>

この事例では、幼児が自分たちで「こうしたい」という目的を実現していく過程において、挑戦しようとする意欲や実現するために情報を取り入れたり、試行錯誤したりする様子、解決に向けて友達同士で協同する姿について考えてみます。

① 事例の概要

氷をつくるために天気予報の情報を元に、友達と一緒に試したり予想したりして「氷をつくりたい」という目的を実現しようと試行錯誤している。

② 具体的な遊びの様子

2月中旬ごろ、併設する小学校のプールに氷が張っていることを発見し、氷をタライにすくって遊ぶ。触ると、「うわー、冷たい」と言いながら、タライから氷を出して触ってみる。目の前に持ってきて見ながら「きれいだね」と言って触っているうちに、一人の幼児が「くっついた!」と大きな声を出す。10センチ四方の氷がクッション材が巻かれた柱にくっつくことを発見した幼児が周りの幼児に知らせ、他の幼児も真似をして柱に氷をくっつけて遊ぶ。また、他の幼児は、「これ、アイスホッケーできそうだね」といい、机に直径10センチ程度の氷を置き、砂場にあったカップをもって氷を打って遊ぶ。

氷が割れたり溶けたりして、遊びがひと段落すると、A児が「自分たちで氷をつくってみたい」と言う。A児と日頃からよく遊んでいたB児が賛成し、砂場道具のプラスチック製のカップやトレイに水を張って人があまり通らない場を選んで置く。『さわらないでね。じっけんちゅう』と文字と氷の絵が書かれた紙を容器の近くにガムテープで貼りつけておく。その後、教師が金属製のトレイやお鍋に水を入れて隣に置いておく。

2日目、登園してすぐ、A児とB児は昨日置いた容器の場所に行く。A児が「できてない・・・」という、B児も「ほんとだ」と残念そうに教師に報告する。「どうしてだろうね」と教師が言い、A児とB児が考えているところに、C児がやってきて、「寒くなかったんだよ。そこはあんまり寒くないから」と言う。A児、B児は「じゃあ、いつも遊んでいて寒いところに置いてみようよ」と、日頃から遊ぶ中で、風が通り抜け、寒い場所を思いつき、水を入れて置くことにした。C児や話を聞いていたD児も加わり置く中で、D児が金属製のトレイを運んでいるときに、「これ、すごく冷たい。キンキンに冷えてるよ。氷になりかけてたんじゃない?」と言う。プラスチックの容器を運んでいるC児が「ほんとだ。こっちより冷たい」という。C児が「これは鉄だから水を冷たくするんだ」と言う。

3日目、氷はできておらず4人は、「なんでプールはできるのに、できないんだろうね」と話し合う。A児が「プールはずっと水があるからじゃない?」と言い、氷ができていなくても何日かず

っと置いておくことにした。来週初めに大寒波が来ると報道があった。教師が学級全体に「とっても寒くなる日があって、一日の一番寒いとき、最低気温が3度だって」と最低気温の話をした。

4日目にD児が登園時に「今日は最低気温は5度だって言ってた！」と言う。教師は学級で使っているカレンダーに『さいていきおん 5ど』と書き込み、学級全体にD児が調べてきたことを伝え、全員で共有する。

5日目には、C児が「今日は最低気温4度だよ」と調べてくるようになり、毎日、カレンダーに書き込むことが日課となった。

大寒波の前日の7日目、教師が学級全体に明日は寒いことを伝える。すると、A児とB児が「明日の最低気温を教えてほしい」と言いに来る。タブレットで教師と一緒に調べ、最低気温が0度であることを伝え、C児とD児を誘い、容器に水を入れて置きに行く。プラスチックの容器を選ぶA児とB児を見て、C児が「この鉄の方が冷えるから氷がしやすいよ」という。4人は金属製のトレーやお鍋を四つ、他にプラスチック製の容器二つに水を入れて置く。降園時、4人が学級全体に氷をつくるために容器を置いていることを伝えた。

8日目、登園後、学級全体で氷ができていないか見に行くと、金属製のトレーとお鍋にのみ氷が張っていた。「できてる！」「やっぱりできてる」「見て！」と興奮気味に話す4人に、「えー！本当に氷ができていないの？」と教師も驚く。「ここがやっぱり寒かったんだね」「最低気温が0度って言ってたもんね」「水が0度になったら氷になるからね」などと言う。教師が「でも、こっちはできてないよ」とプラスチック製の容器に氷ができていないことを指摘すると、D児が「これは、鉄だから冷たくなりやすいんだよ」と言う。C児も「そう。この前すごく冷たくなってたもん」と言う。できた氷を持って「すごく冷たい」「ずっと持ってたらずが痛くなる」「見て。氷を持つと手が赤くなった」「キラキラ光っててきれい」「おひさまに当てると光が集まって、星みたい」と言う。しばらくすると、A児が「プールの氷より厚いね」と言うと、D児が「プールの氷は持つと割れちゃったり、すぐなくなって薄い氷だったけど、これは厚くて持っても割れない」と言う。教師が「あつい？」と言うとC児が「ぶあつってこと」と言う。氷ができたことを喜ぶと、「明日はもっと大きな氷が作りたい」とC児が言い、タライに水を入れて置いておくことにした。A児は、「色の水を置いて置いたら、色がついた氷ができるかも」とB児と絵の具で色の水をつくって置いた。



③ 環境の構成

- ・ 幼児が最低気温に関心をもち氷ができるかどうかとの関係に気付いたりできるようカレンダーに記録した。
- ・ 氷をつくる際の容器の素材に気付けるよう様々な素材に水を入れて実験できるようにした。
- ・ 小学校と併設であることを生かし、小学校のプールの氷に関わって様々な遊びを楽しむ時間を設け、氷への関心を引き出した。
- ・ 幼児の関心に合わせた必要な情報を得られるようにICT機器を活用した。

- ・最低気温や容器の素材などを氷の出来具合と関連して考えられるよう正解を伝えるのではなく、幼児が考えたことを実験できるようにした。

④ 意図

- ・今後気温が低くなることを見通し、氷に関心がもてるような声掛けや活動を取り入れた。
- ・氷ができた際に満足感を高めたり次なる目的を定めたりできるように、教師も一緒に驚いたり考えたりした。
- ・実験がうまくいかない場合でも、原因を探ったり方法を変えたりして何度も取り組めるように幼児の考えを受け止め見守った。
- ・幼児の関心が継続するよう関心が薄れた際には学級全体で話題にして、タイミングを逃さず実験ができるようにした。
- ・数名の関心が学級全体へと広がるよう降園前の時間に情報を共有する時間を設け、関心が広がるようにした。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、省察する。）

- ・氷の実験に失敗しても原因やよりよい方法を友達と一緒に考え、繰り返し挑戦することを楽しんでいる。 自立心
- ・友達や学級の人々と考えを出し合ったり協力したりしながら同じ目的に向かって取り組む姿から、友達の存在の大切さや目的に向かって力を合わせる喜びを感じている。 協同性
- ・実験をする場所を提案したり、容器の素材によって水の冷え方が異なることなど気付いたことを友達に伝えたりする姿から、同じ目的に向かう中で自分の力を発揮する喜びを感じている。 協同性
- ・氷をつくるためにテレビやＩＣＴ機器を使った情報を自分から収集し、自分たちに必要な情報を取り入れることで、より遊びを楽しくしたり活動に見通しをもったりしている。 社会生活とのかかわり
- ・何度も実験をすることを通して氷ができることと最低気温との関係が分かり、水の性質を理解し性質を遊びに取り入れている。 思考力の芽生え
- ・目的に向かって繰り返し取り組み、できた氷を比較したりする中で「大きい・小さい」「薄い・厚い」などの様子や状態を表す言葉が多く使っている。 言葉による伝え合い
- ・「最低気温」という知らない言葉を覚えて使ってみたり、氷を「星みたい」と表現したりする姿から新たな言葉と出会う喜びや、これまで見たり経験したりしたことがある何かに例え言葉で伝え共感できる喜びを感じている。 言葉による伝え合い
- ・氷の実験をしている場に「じっけんちゅう さわらないで」と文字や絵で自分たちの思いを表していることから、文字や絵が様々な人に伝えるツールの一つであることが分かり、使っている。 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ・水が氷になるという身近な現象を自分たちがつくり出す経験をすることで、自然の不思議さや美しさに触れ、経験したことや感じたことを友達や教師に伝えている。 自然との関わり・生命尊重

⑥ 事例6をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

この事例では、三つの視点から考えてみます。

まず一つ目は「意欲」という点です。

この事例では、小学校プールにできた氷で遊ぶことを楽しむ中で、幼児が氷というものに興味や関心をもち、自分たちで作ってみたいという意欲を持ち始めていることを読み取っています。教師も一緒に氷に関わって遊ぶ中で、氷の不思議さや面白さに共感しながら、新たな目的をもったり、遊びを発展させたりしようとする姿を捉え、そのときにしかできない体験や自然との関わりを、時期を逃すことなく取り入れることが大切であると思います。

二つ目は「思考力」という点です。

幼児は氷を作るために実験を始めますが、容器の素材や置く場所によって氷のできやすさが異なることには気付いていません。そこで、教師も遊びの一員として加わり、幼児が考えたり比較したりすることにつながる環境を設定したり、新たな視点を与えたりすることで、氷の性質や気温との関係性に気付けるようにし、思考力を支えています。

三つ目は「試行錯誤」という点です。

なかなか氷ができない場面で、最低気温をカレンダーに書き込むことで幼児の意欲を継続させたり、目的に合わせた情報を取り入れたりしています。思い通りにいかなくても試行錯誤したり工夫したりして粘り強く取り組む時間を保障し、価値づけていくことが重要だと思います。

この事例からⅢ期に向けて、どのようなことが大切なのかを考えてみます。

探究心をもって自分なりに考えたり、試したりする経験を積み重ねることで主体的に問題を解決しようとする姿につながると思います。教師が、子どもの興味や関心にあった活動を提示し、自分なりの目的に向かって試行錯誤する時間を保障していくことも重要であると思います。その中で、同じまたは似た目的をもった友達と関わったり、力を合わせたりする経験をする中で、自分を発揮する喜びや人と関わる楽しさを感じることができ、学校生活により意欲的になると考えられます。

次に、この実践からⅠ期を振り返ってみます。

様々な遊びや体験をする中で、幼児が「やりたい」と思い、夢中になって取り組むことが大切だと思います。氷だけではなく自然物を使った色水や水路づくりなど自然を取り入れた遊びなどを通して思い通りにいかずに試行錯誤したり、自分なりの目的をもって粘り強く取り組んだりすることが重要です。その経験が土台となって、様々な事象や現象に関心をもつ姿につながるのではないかと思います。



事例7 II期（5歳児3月）

全然、決まらない

—みんなで遊ぶ遊びを決める—

事例を読み取る
キーワード

・主体性
・思考力
・自立心

<事例で伝えたいこと>

この事例では、3月の卒園お祝い会が終わり、日々過ごす中で、園の主活動を自分たちで決めていく場面を取り上げます。

自分たちのやりたいことを自分たちで話し合いをとおして主体的に決める中で、自分の気持ちを調整したり、友達と折り合いを付けたりして、みんなで納得して解決していく経過について考えてみます。

① 事例の概要

園生活も残り少なくなっている。みんなで残りわずかな時間を大切に過ごそうと「みんなで遊ぶ遊び」の内容を決めることにした。幼児から3案出てきたため、どうしたらよいか、自分の意見を言葉で伝えたり、友達の意見を聞いたりして決める。今までの経験してきたことを生かして、遊びたい遊びを決めた。

② 具体的な遊びの様子

卒園お祝い会終了後の3月下旬。保育園では、卒園お祝い会後も引き続き5歳児が登園する。一方、保育室は下の学年が移行して生活をしているため、他学年と連携しながら保育室や園庭など使用している。

その日の午前中は、5歳児がホールを使用、また、午前11時以降は園庭も独占して使用できる計画となっていた。（普段から乳児と幼児で時間を区切って園庭を使用）

この時期は、朝の会では、幼児たちに今日の予定と使用できる場所を伝え、幼児たちと一緒にその日の活動内容を考えることにしている。

この日、幼児たちから挙げたのは、①椅子取りゲーム、②金貨ゲーム（＊3）、③ストップゲーム（＊4）の3案であった。三つの遊びのうち、椅子取りゲームは7名、金貨ゲームは6名が希望し、ストップゲームを希望する幼児は1人のみであった。

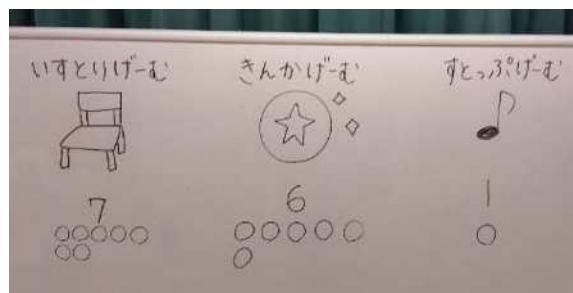
保育士は、希望する人数を整理すると、その後、幼児同士での話し合いが始まった。

＊3 金貨ゲーム…はじめに1人5枚金貨を持ち、一定時間内で友達とじゃんけんをして買ったら金貨を1枚もらえる。負けたら金貨を1枚あげる事を繰り返していく遊び。

＊4 ストップゲーム…音楽が鳴っているときは動き、音楽が止まったら動きも止める。動きを止められなかったら、ゲームは休み。

<話し合いの様子>

(A 1 児、B 1 児、C 1 児は①椅子取りゲーム
M 2 児、N 2 児、L 2 児は②金貨ゲーム、W 3
児は、③ストップゲームを推している)



A 1 児 多数決でいいんじゃない。

M 2 児 多数決だとストップゲームができなくて、
かわいそうだよ。

A 1 児 じゃあ、どうするんだよ。

M 2 児 それをこれからみんなで考えるんでしょ。

B 1 児 じゃあ、よい所を伝え合おうよ。椅子取りゲームはみんな楽しいし、最近やっていない
からいいと思う。

N 2 児 金貨ゲームだって楽しいし、金貨使うんだよ、金貨。すごいじゃん。あと、椅子をわざ
わざ持ってこなくてもいいの。

M 2 児 Wちゃんはどう思う？やっぱりストップゲームがやりたい？

W 3 児 やりたい。

A 1 児 全然、決まらないじゃん。もお、どっちでもいいから早くやろうよ。もう、金貨ゲームで
いいよね？

B 1 児 やだ、椅子取りゲームがいいの。

A 1 児 じゃあ、椅子取りゲームでもいい？今度、金貨ゲームやろうよ。

M 2 児 えー、今度はいつできるか分からないじゃん。

A 1 児 先生、全然決まらない。先生、決めて。

自分の案のよいところを伝えるが、なかなか決まらず、少しずつ集中がきれてくる幼児がいる。

保育士 自分の思っていることを伝えたり、友達の話もしっかり聞けたりしましたね。

とても、よいと思いました。しかし、ここで先生が決めてしまっているのかなあ。

先生が決めたら、やりたいことができないかもしれないよ。

(幼児から「やだあ」の声)

それに、全員、意見は言えたのかな？

(周囲を見渡す)

まだ、話していない人に聞いてみたらどうかな？

そこから、まだ発言していない人に聞いていた。

A 1 児 Cくんはどう？

C 1 児 どっちでもいい。

A 1 児 Lちゃんは？

L 2 児 私はやっぱり、椅子取りゲームがいいかな。

意見をしていない人にも聞いた後、保育士に助けを求めてくる。

A 1 児 やっぱり決まらない。

保育士 みんなどれ遊びたいんだよね。先生も同じ気持ちだよ。

だから、先生からうまくいくヒントです。

今日はいつもより時間がたくさんあります。

M 2 児 えー！そうか、三つともやろうよ。時間がたくさんあるから全部できるよ。

A 1 児 おー、それにしようよ。じゃあ、順番どうする？

B 1 児 1 番（人数が）多いところからにしようよ。

M 2 児 それじゃあ、Wちゃんが嫌がるかもよ。Wちゃんは何番目がいい？

W 3 児 1 番最初。

M 2 児 じゃあ、最初にストップゲームをして、次に椅子取りゲームをして、最後に金貨ゲームをしようよ。

A 1 児 いいじゃん、それにしようよ。先生、それでいい？

保育士 先生はみんながいいなら、それでいいよ。みんなにいいか聞いてみて。

A 1 児 みんな、それでいい？

全員了承する。

保育士 時間はどうしようか。

M 2 児 三つに分けたらどうなるの？

保育士 そうだね…そのあと、みんなは園庭でも遊びたいかな？

A 1 児 遊びたい、遊びたい！（ほとんどの幼児が賛同）

保育士 1 1 時から園庭が使えるから、だいたい、3 0 分ずつくらいかな。

長い針が6から12に移動するまで。

M 2 児 じゃあ、そうしよう！

その後、保育士がホワイトボードに時間の目安を書き、時計の図にして伝えた。

そして、多数決ではなく、みんなで納得して決めたことや自分たちで話し合いを進めていること、何よりも5歳児としての1年間、春からの成長の姿をたくましく思い、嬉しい気持ちも伝え、みんなで楽しく遊んだ。

③ 環境の構成

- ・朝の会をホールで行うときは椅子を使用せず、円型になって行っている。今回の話し合いも、朝の会の延長で行い、三つの案に分かれたところから三つの固まりごとに分かれて座る。
- ・話が複雑化したときのために、ホワイトボードも用意した。
- ・結論はホワイトボードに絵と文字を書き、視覚的に分かりやすいようにした。

④ 意図

- ・集団の中で自分のやりたいことや自分の気持ちを言葉で相手に伝える。
- ・集団の中で友達の意見を最後まで聞く。
- ・自分と違う意見があることを知り、その中でどのようにしたら、お互いに納得した解決する。
- ・友達と話し合う事柄のイメージを共有し、共通の目的に向かって話し合う。

- ・物事を決めるときに多数決の方法以外にも方法があることを知る。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、省察する。）

- ・自分たちでやりたいことを話し合い、「やりたいことができる」という期待をもって、実現に向けて話しを進めている。健康な心と体
- ・遊びを決めるにあたり、主体的に自分の思いを伝えながら関わっている。自立心
- ・友達との話し合いをする中で、時には自分の気持ちを調整し、友達との折り合いを付けながら、主活動の内容を決めている。協同性
- ・友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自らの意見をさらに主張したり、考え直したりする。思考力の芽生え
- ・自分たちで話し合いを進める中で、自分の考えを相手に分かるように言葉で伝える。相手の考えを注意して聞く。言葉による伝え合い
- ・自分が希望する案の人数を数える。また、他の案の人数と比較する。その中で数の大小の感覚が育つ。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ・遊ぶ時間を知り、実際に遊ぶ中で、時間に対する概念や感覚が養われる。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

⑥ 事例6をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

本事例のこの時期は、園生活も終わりに近づいている時期です。残り少ない園での生活をどのように計画し、幼児とどのように過ごしたらよいのか、「幼児とともにづくりだす生活」について考えてみます。

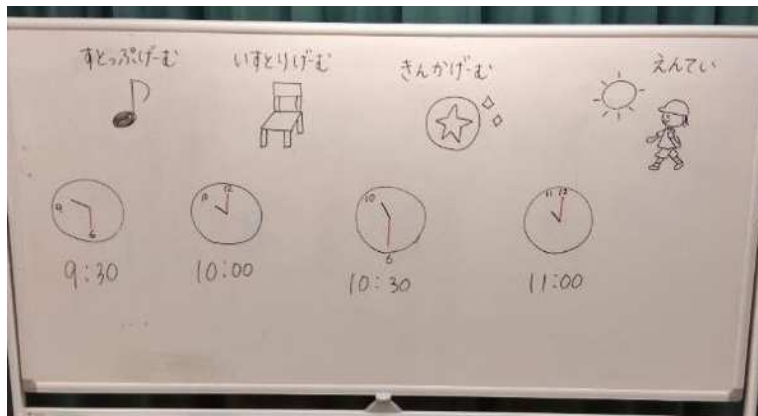
これまで長い時間過ごしきた、慣れた園の環境の中では、自分たちで一日の見通しをもちながら、自分たちで主体的に進めていく生活となるようにしたいものです。お祝い会を終えたからと言って、ただ時間を過ごすのではなく、幼児の思いや願いの実現に向けて、保育士と「ともに」考えながら、意味ある生活となるように工夫することが重要です。

事例では、保育士は、Ⅰ期から積み重ねてきた話し合いの経験を生かして、みんなで楽しい時間をつくるための計画をしていました。

保育士は、グループによる話し合いの機会を積み重ね、話し合いの過程では、保育士が幼児の話をよく聞くことで幼児が伝える喜びを感じられるようにすること、話し合いのテーマは、自分たちがやりたいことや困っていることなどを取り上げてきたことで、一人ひとりが自分事として話し合いに参加できるようにすることで、集団の中で積極的に話す姿や自分たちで話し合いを進めようという姿につながっていたと思われます。このような「やりたい」という気持ちが湧く活動や必要感を伴った活動を提供していくことで、幼児が主体的に取り組む姿を引き出していくと思われます。「自分たちで決めた」という成功体験を積み重ねていくと、再度「自分たちでやってみよう」という気持ちが育まれ、小学校の学習においても「自分たちでやろう」という意欲につながっていくことが期待されます。

さらには、一人ではできなかったことがみんなで取り組んだらできた満足感や充実感や、集団の中で一人ひとりが自分の得意なことや好きなことに力を十分に発揮してきた生活があるから

こそ、「みんなで」取り組む楽しさが芽生え、Ⅲ期以降への学習にもつながっていくものと思われます。



事例8 Ⅱ期（1年生4月）
ことばのとびら—国語科の取組例—

事例を読み取る
キーワード

・言葉（語彙）
の広がり
・経験を生かす

＜事例で伝えたいこと＞

この事例では、教科「国語」の教科書の内容から、1年生の入学当初は、学習がどのように始まるのかについて、小学校の実践を取り上げます。子どもたちは、読み聞かせや言葉遊びなど、園でもたくさんの言葉に触れる活動をしてきています。これまでに習得してきた言葉を学級の中で発表したり、分類したりする中で1年生の学習の内容を理解していく過程について考えてみます。

① 内容

○単元「あいうえおで あそぼう」(光村図書) 第1時/2時間

【目標】 声に出して楽しく読み、「あいうえお」に親しむ。

幼児期の経験を生かして、言葉の世界を広げていく。

【担任教師が心掛けること】

- ・ 保育園、幼稚園での経験は一人ひとり異なるため、子どもたちの経験や身近な生活の中から言葉を広げていく。
- ・ 自分たちのこれまでの生活を振り返り、「あいうえお」にあてはめながら、言葉遊びを子どもと一緒に楽しむ。

【幼児期の経験を生かす工夫】

- ・ 教室の一角に保育園や幼稚園で親しんできた絵本や児童書を用意し、登校してから朝の会などが始まる前までの時間や、休み時間等で各自が読めるようにした。
- ・ 前時に、教科書に掲載のある絵本「あいうえおおかみ」（作：くどうなおこ 絵：ほてはまたかし 小峯書店）を読んだ。
- ・ 教科書の内容を学ぶだけでなく、自分たちの経験を発表したり、作品づくりに活かしたりできる学習のゴールを設定した。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T＝教師 C＝児童

＜導入の場面＞

T この間、オオカミが出てくる「あいうえお」の絵本を見たよね。オオカミが「あいうえお」の町でどんなことして遊んでいたか覚えている？
(絵本を見せながら)

- C 一輪車。野球とかサッカーとか。
- T そうだったね。絵本を読んだあと、〇〇さんが「あいうえおのうたと似ているね。」と、言っていたんだけど、どうしてかな？
- C オオカミくんがあいうえおの楽しいお話をつくって遊んでいたときに、教科書の「さんかく・しかく」を「サッカー・シュート」にできると思ったんだ。
- C 先生！他の言葉もできるよ！
- T 本当？他の言葉ってどんなの？
- C あいうえおの言葉だったら・・・あざらし アイス 空き缶 いす いるか いちご！
- C なんだか1年1組のあいうえおの歌ができそう。
- C 楽しそう、つくろうよ。いいね、続きもつくろう。
みんなの気持ちが「あいうえおの歌づくり」へと向く。

<児童の気付きを取り入れ生かす>

- ・担任は、次々に児童が発する言葉を板書する
- C 「あいす」「あかるい」「あざらし」「あさひ」「いす」「いるか」「いちご」
(児童から次々に言葉が出てくる。)
- T まだあるかな？
- C もっとあるよー
- T たくさんだね。黒板に書ききれなくなってきた。たくさん言葉が集まったね。
1年1組あいうえおの歌は、どれを使おうか？
- C 「あいす・いるか・あいうえお」 とか。
- C (出てきた言葉を眺めて) でもさ、バラバラだと、なんか変だよ。
- T 何が変なの？何か気付いたことがあるのかな？
- C 「さんすう」は「しゅくだい」に出るけど、「さかみち」は「しゅくだい」に出ない。
- C そうだよ。「さんすう」「しゅくだい」って言うと、「勉強」って感じがするよ。
- T なるほど、そうか。おかしい感じがするんだね。
何かこうしたらいいっていう考えはある？
- C 「あ」のところは、動物にするとか？
- C うん、幼稚園で、グループの名前を決めるときに、動物の名前とか、花の名前とかで決めたりしたよ。
- T なるほど。
「あ」は生き物、「か」は花の名前とか、仲間同士にして決めるっていうことね。
他の行も仲間で作ってみる？
- C その方が覚えやすいし、教科書と同じみたいになるよ。
- Tすごい。みんなのオリジナルあいうえおの歌ができちゃうね。



学級みんなで考えた「1ねん1くみ あいうえおであそぼう」の歌

② 「ことばのとびら」の実践をととして、「接続」部分の理解を深める

実践をもとに、国語の授業の始まりについて幼保小の先生で協議をしました。

(幼 T=園の先生 小 T=小学校の先生)



幼 T 幼稚園・保育園から見ると、日常生活で使っている言葉がすべて国語につながっているように思いますが、小学校では学習としての「国語」は、どのように始まるのですか。

小 T 国語の学習の導入部分では、児童は入学して「教科書を使って勉強したい」という学習に意欲的な気持ちをもっていますので、その気持ちに応えられるようにしたいと思っています。国語の学習は大まかに、「話をよく聞くこと」「自分の思いを伝えること」「字を書くこと」「文字を読むこと、お話しを読むこと」です。小学校の学習のはじめの一步は、とても大切です。生活の中から国語の内容に触れたり、どんな学習なのだろうと知ったりする時間を「授業開き」と言うこともあります。

幼 T 「授業開き」って何ですか？

小 T 始めかたはいろいろあると思います。例えば、まだ文字が読めない、書けないという入学したての1年生に向けて、教科書を自分で自由に見る時間をとります。「楽しそう」「これ、何するんだろう。」「このお話、知ってる！」とそれぞれが自分の気付きを表現できる時間をとります。自分のペースでページをめくり、「これはなんだろう？できそうぞ。」「どんなことするのかな？」と、国語の学習への意欲を高めることを大切にしています。具体的には、こ

れまでに習得してきた語彙を使ってしりとりや言葉集めを楽しむ、そして教科書の扉の絵を見てイメージを膨らませ、自由に発言したり、考えを共有したりする中で、学習に入っていきます。そうすることで、「自分の発言で学習できた。」「学習は、自分が思ったことを伝えるといいんだ。」という気持ちをもって教科書の学習に入り込めるようになります。実際に授業を進めてみると、保育園・幼稚園で経験してきていることは一人ひとり異なり、語彙量も異なりますが、経験してきたことを話したり文字に表したりして、学級のみinnで共有しながら、言葉の世界を広げていけるようにしています。

幼T 自分の言葉で話すことは、園の生活でとても大切にしてきました。けれども、文字を読むことや文字で表すことは個人差もあり、だからと言って、園では全員が字を読んだり書いたりできるようになる指導はしていません。読みたい、書きたいという、幼児の「〇〇したい。」という気持ちをとても大切にしています。小学校では、どのような工夫をされていますか。

小T 小学校では、園で経験してきたことを尋ねながら、たとえ間違っているとしても、まずは「どんなことでも自分で考えたことを話していいんだよ。」という雰囲気や教師のまなざしは、小学校でも、安心して自分を出せるような教師との関係づくりがとても重要と考えています。

幼T 「安心して自分を出していいんだよ。」という温かい雰囲気や教師のまなざしは、小学校でも大事にしているんですね。

小T 教師は、「もっと知りたいな。」「教えてほしい。」という気持ちで児童に言葉をかけ、話していることを文字や絵などを板書して、話し言葉を補うようにして、それを共有しながら、みんなが理解できるようにしています。

幼T 絵があると視覚的にも理解しやすいですね。文字を読めるようになっている児童もいますが、絵と文字を同時に表記することによって、すべての児童が理解することが出来ますね。教師との関係づくり、友達同士の関係づくりを大切にしていることも園と同様ですね。そして、自分の言葉でなんでも話せるようにすることも大切なですね。

小T そうですね。お互いの好きなことを紹介し合ったりして、話しやすいテーマで話したり聞いたりする活動も取り入れたりして、友達との関係づくりも意識しています。

小T 「読むこと」「書くこと」と言えば、小学校でも、絵本の読み聞かせをしています。

幼T なるほど。園でも、絵本の読み聞かせは日常的にしています。絵を見たり言葉を聞いたりして、お話のイメージをふくらませ、イメージを豊かにすることを大切にしています。知らない言葉に出会うと、「それってどういう意味？」と尋ねたり、面白いリズムカルな言葉はすぐに覚えて繰り返し楽しんだりしています。表現遊びなどのように、その役になりきって遊ぶなど、絵本からの情報を得て、さらに体験を豊かにしています。

小T そう考えると、「絵本の読み聞かせ」の活動は、幼児教育と小学校教育がつながっているイメージがもちやすいですね。

幼T はい。「とびら」の実践から、その後の展開に「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などがつながっていて、学習が始まっていく様子がイメージしやすいです。

小T ところで、絵本の読み聞かせの他にも、園で「言葉」を扱う活動はしていますか。5歳児の

言葉の指導において何か意識していることはありますか。

幼T やはり、指導の中で意識しているのは、日常の生活の中で直接的・具体的な体験とセットで実感を伴っていると、言葉のもつ意味とイメージとが結び付いていくと思いますので、体験や経験を大事にしています。例えば、生活に必要な当番などをするグループの名前を決めることがあります。3、4人でグループ名を決めるときに、「なんでもあり」にしてしまうと、一つの言葉に決めにくく、グループのみんなが納得して決めることが難しいので、生活の中で興味や関心のあるテーマを設けています。具体的には、遠足で水族館に行って楽しかった体験から「水族館にいるものの名前にしたい」などの気持ちが見られたとき、「水族館にいる魚の名前」というテーマで決めるなどです。単に「魚の名前にしましょう」と言っても興味は湧きません。水族館で見てきた魚が幼児にとって身近に感じられる体験となったからこそ、グループの名前を決めたいという発想が出てきます。幼児期は、そうした楽しかった体験や感情が揺さぶられるような経験を大事にしながら、言葉が育まれていくと考えています。

小T 言葉の意味や概念を、身近な生活の中での体験を通して理解したり、言葉を獲得したりしていくということですね。

幼T そうですね。そして、身近にいる私たちが話す言葉の影響力は大きいので、挨拶の言葉、相手や場所を意識した言葉、心ある言葉を使えるように努めたいです。

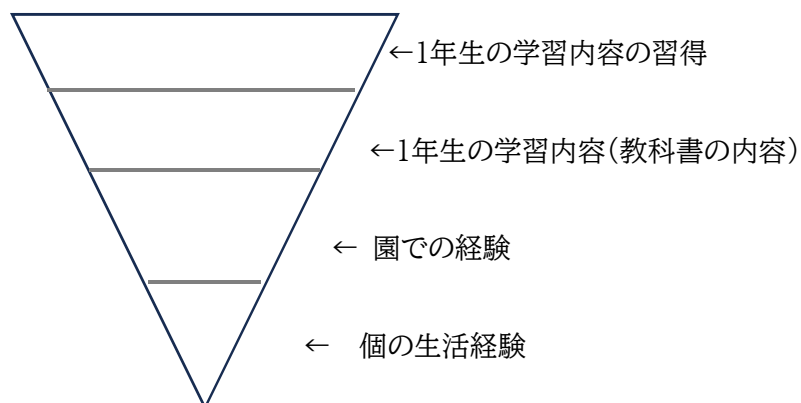
小T はい。国語は、子どもが生活の中で使用する言語と直結していますね。そこに、徐々に学習としての言語が入り、イメージと言葉の意味を理解して、言葉の世界を広げ、最初は「話すこと・聞くこと」が中心の生活ですが、文字を読むこと・文字を書くことも自然に無理なく取り入れて、興味や関心をもてるようにしていくことが大切ではないかと思っています。

③ 国語の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

児童は、幼児期からの体験や経験を通して様々な言葉を獲得しています。小学校の学習では、言葉の世界を広げ、これまでの体験や経験で得た学びを継続する形で学習が始まります。よって、小学校では、児童一人ひとりの体験や経験を十分に生かしながら、「もっと知りたい。」「もっとやりたい。」という意欲を育てられるようにしていくことが、このⅡ期で重要となります。

④ 事例8をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

幼児期の活動は、1年生の学習内容につながっていて、子どもたちの経験が学習内容の習得につながります。これは、学びのとびらをあける鍵になっていることが分かります。



Ⅲ期の学習に向けて、どのようなことが大切なのかを考えてみます。今回の実践では、全員の児童が、50音全ての単語を考えたり、発表できたりしたわけではありません。今後、児童が「もっとやってみたい。」という気持ちをもって次の学習に取り組むようにするには次のような工夫が考えられます。

- 今回、発表された単語を掲示しておくことで、授業が終わっても掲示物を見たり、単語を考えたりすることができ、「もっとあるかもしれない。」と、学びが続いていく。
- ノートに書く、短冊に書いて掲示物にプラスして貼るなど、挙手をしなくても自分の気付きを表現できる場をつくることができる。また、タブレット端末などICT機器を活用し、全員が一斉に表現できる場をつくることもできる。(小学校では、タブレット端末内に提出機能があるアプリや一つの画面にデジタルの付箋を貼っていく機能などがある。)

これらの工夫は言葉遊びだけでなく、どの学習においても児童が学びを続けていくのに有効な手立てだと考えられます。学級全体で互いに学び合いながら学習を進めていくのもⅢ期に向けての児童の姿だと思われます。

I期について振り返ってみると、幼児期の様々な経験が学習の根底にあることが分かります。

今回の事例では、自分の知っている単語を発表したり、組み合わせたりする「言葉による伝え合い」が行われる場面、みんなで一つの作品をつくり上げようとする「協同性」、教科書の作品と同じものをつくるためにカテゴライズを行おうとする「思考力の芽生え」、これらは、幼児期に育まれてきた資質・能力によるものだと思われます。

事例9 II期（1年生4月）
かずのとびら—算数科の取組例—

事例を読み取る
キーワード

・数量の感覚
・日常生活との
・主体性
・興味や関心

<事例で伝えたいこと>

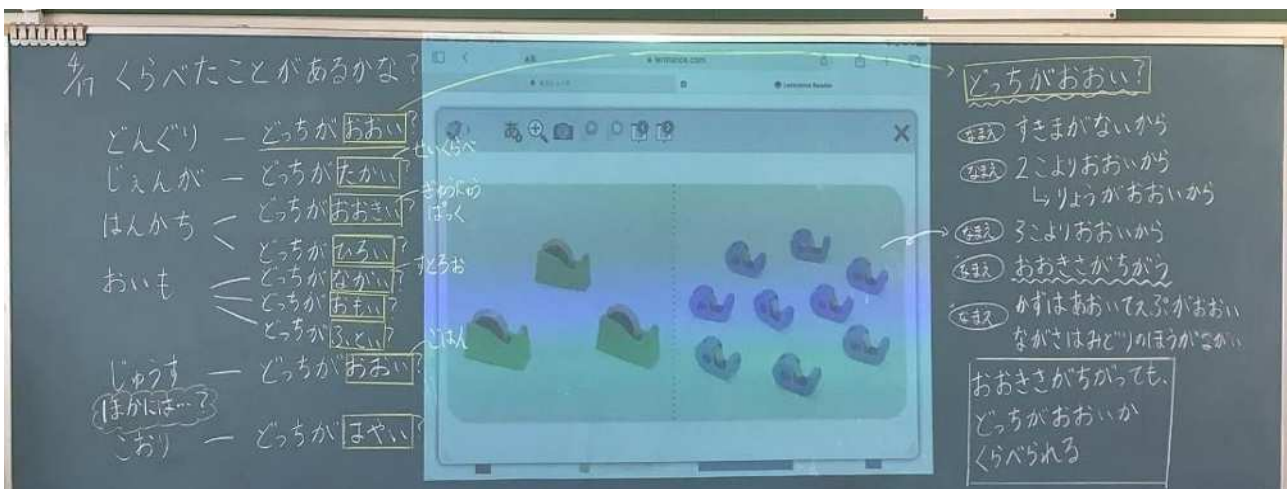
この事例では、教科「算数」の教科書の内容から、1年生の入学当初は、学習がどのように始まるのかについて、小学校の実践から考えてみました。特に、これまでの経験や体験を引き出すような教師の言葉掛けや板書に着目し、児童の言葉を活かしながら主体的に取り組めるような工夫について考えてみます。

① 内容

○単元 「くらべたことあるかな」 第1時/1

【目標】 幼児期に育った数や量への関心・感覚を想起して、算数の学習への期待をもつ。

板書例



【幼児期の経験を引き出す問いかけ】 (T=教師 C=児童)

左側の板書

T 二人は何をくらべているのかな

C どっちがおおい (たかい おおきい ひろい ながい ふとい おもい など)

T みんなもくらべたことがありますか

右側の板書

T 緑のセロハンテープと青のセロハンテープの数はどっちが多い?

T なぜ? ほんと? (子どもたちは理由を言う)

C 隙間がないから

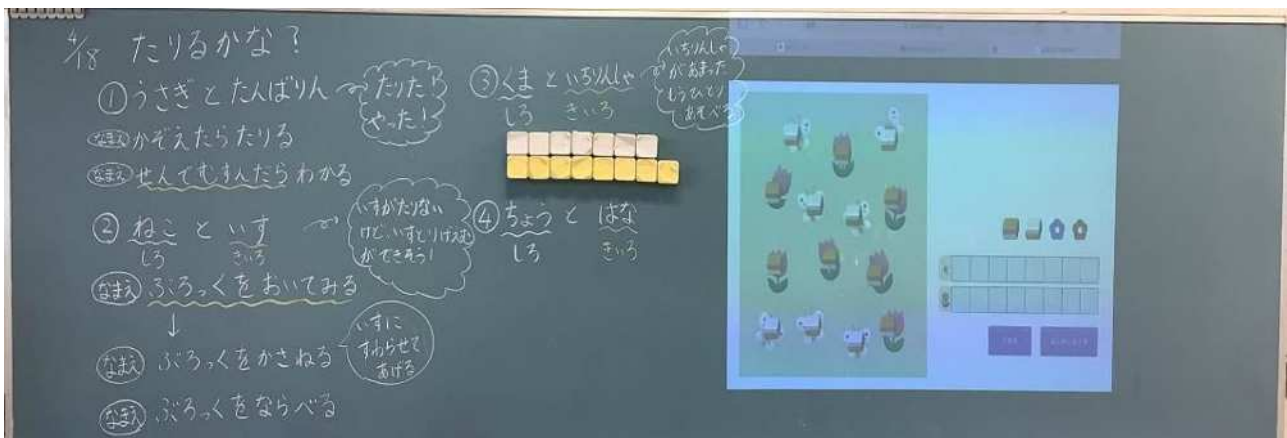
- C 2個より多い
- C 大きさが違う
- T 緑のセロハンテープと青のセロハンテープは？
どっちが長く貼れるかな？
- C 数は青いほうが多い 長さは緑のほう
- T 比べるときに、大きさが違ってても、数は比べられるね
- T 消しゴムと筆箱は、物が違うけど、比べられるかな

○単元 「なかまづくりとかず たりるかな 」第1時/15

【目標】

集合の要素の個数の多少を1対1対応の方法で比べることができ、数が同じ、違う（多い 少ない）などの意味を理解する。 第1時/1

板書例



【幼児期の経験を引き出す問いかけ】

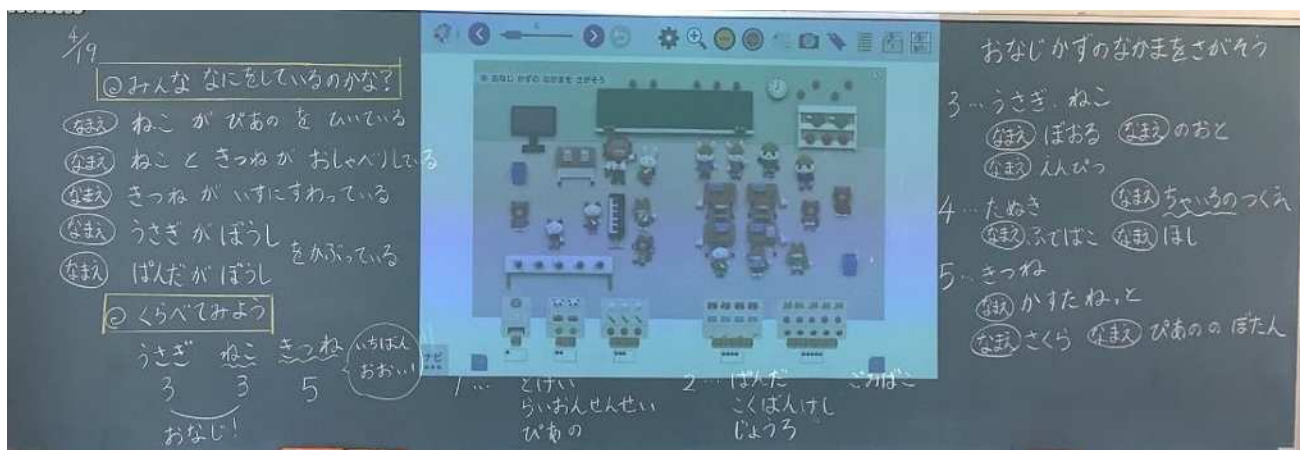
- T 音楽会があるんだけど、うさぎさんがタンバリンの担当なの。
タンバリンはたりるかな？
- C 数えたら たりる
- C 線で結んだら わかる
- C ○でくくる
- C たりたよ やった！
- T 椅子取りゲームやったことある？
ねこさんがやっているんだけど、椅子はたりるかな？
- C ブロックをつかってくらべる
- C 色をわけたほうがいい
- C ブロックを重ねるといい
- T いすがたりない こまった！

○単元「なかまづくりとかず おなじ かずの なかまを さがそう」第2.3時/15

【目標】

数量の大きさを表す「いち」「に」…「ご」の数詞と、「1」「2」…「5」の数字が対応していることを知り、1～5個の「もの」の数を数えることができる。

板書例



【幼児期の経験を引き出す問いかけ】

- T ここはどこでしょう？そうだね、動物さんたちの教室みたいだね。みんなと同じ、これから勉強が始まるのかもしれないね。みんな何をしているのかな？
- C ねこがピアノを弾いている
- C ねこ きつねがおしゃべりしている
- T そうだね。今日は、同じ数の仲間を探してみよう
- T 今度は、くらべてみよう

② 「さんすうのとびら」の実践をとおして、「接続」部分の理解を深める

実践をもとに、幼保小の先生で協議をしました。（*幼T＝園の先生 小T＝小学校の先生）



- 幼T 小学校の学習は、教科書を使っていきなり学習が始まるイメージですが、みんな付いていけるのか心配です。何か工夫していることはありますか？
- 小T 例えば「算数」では、学習が始まる「とびら」の部分があります。
これはとても大事な、小学校の学習の入り口です。
算数の「とびら」の部分は、幼児期に育まれた数や量への関心・感覚を想起できるような工夫をしています。
- 幼T 具体的にどのような工夫をしているのですか？
- 小T 「幼児期の育ちや学びを生かす」という視点から、言葉掛けを工夫しています。

幼稚園や保育園の先生からお話を伺うと、「幼児期にいろいろなことを経験してきている」と言われます。算数の学習の導入の部分では、子どもが、具体的な生活の場面やこれまでの経験を想起し、イメージをもちやすいような言葉掛けを意識しています。

「こんなことやったことある？」と投げかけると、すぐに答えが返ってくるので、それを次々に板書して、いろいろな経験を引き出していくように心がけました。

幼稚園や保育園では、5歳児の後半に、特に意識していることはありますか？

幼T 意識していることは、園の生活では、何か困ったことや幼児が疑問に思ったことがあったときに、教師がすぐに正解を伝えたり、解決の方法を提示したりするのではなく、幼児が考え、様々なことを試したり、友達と考えを出し合ったりしながら、解決に向かう姿を見守ることを大切にしています。

小T 具体的に、どのようなことでしょうか。

幼T 教師は、幼児の気持ちを読み取って、状況を整理したり、解決の方向性や選択肢を提示したりしながら、幼児と一緒に考え、その時や場に応じた解決ができるようにしています。そこには、必要感が伴っていて、特に5歳児の後半になってくると、これまでの経験を生かしてどうにかしようと試行錯誤する姿が見られます。幼児が抱く「こうしたい」という気持ちを大切に、必要感をもち、考える機会を奪わないようにしています。そのためには、必ずしも人数と同じ数を用意すると決めなかったり、全てがうまくいきすぎるとはしなかったりするなど、完全過ぎない不完全な環境にしておくこともあります。そのような様々な機会を通して、「考える」ことが、結果として小学校以降の学習に生かされ、つながっていくと思い、指導を行っています。

小T 幼児期に「問題を解決していく」ということは、難しそうに思うのですが。

幼T 例えば、こんなことがありました。米袋で育てていた大根を収穫するという場面でのことです。ようやく収穫というとき、子どもたちが「収穫した大根を家に持ち帰りたい」と言いました。自分で育てた大根なので、持ち帰ることで納得したのですが、学級用としての大根もたった一本ですが、ありました。大切な1本を「どうしようか」ということになり、「誰も持ち帰らない」「みんなで分ける」「くじ引きで当たった人がもらえる」…など様々な意見が出ました。教師は、「持ち帰りたい」という幼児の気持ちを察し、「みんな持ち帰りたいんだよね」と共感すると、今度はみんなが持ち帰るために、どうしたらいいかを知恵を絞りました。「どの辺を切ったらよいか」「葉っぱの部分と白い部分のどちらがほしいか」などいろいろな考えがでてきました。全員が納得する答えがなかなか出なかったのも、教師も一緒になって知恵をだし、グループに4分の1本ずつの大根を渡し、あとは子どもたちに任せることにしました。すると、譲り合って、「このくらいでいいか」などと、相手を気遣いながら、分け合っている姿が見られたのです。

小T そんなふうに解決していくのですね。これ以上はもう考えが出てこないと教師が見極めて、教師もアイデアをだして、そのあとは、幼児に「任せる」のは、幼児を信頼しているからこそできるのですね。「解決に向かう姿を見守る」ことを大切にしているのは、小学校も共通です。幼児期に、そうした経験があると、教科書の場面が自分たちの経験との結びつきで自分事としてとらえ、教師のイメージが浮かびやすいですね。

幼T はい。教科書の場面での、そのイメージに合うような問いかけは、わかりやすく、子どもが具

体的な場面を想起しやすく、幼児期の経験を生かして考える中で、算数の学習につながっていくのだと思いました。

「かずのとびら」には、接続で大切にしている幼児期の経験を土台にした学習の意味があるのですね。このようにみても、「接続」していることがわかります。

園では、これからも実感がもてるような経験や必要感をもって自分から考えることができるような経験を大事にしたいです。

③ 算数の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

幼児期は、具体物をととして体験や経験をしています。小学校の学習は、幼児期の体験や経験を基礎として、「数」の世界を広げていきます。幼児期の体験や経験をとおして得た学びを具体物から半具体物へと形を変えながら、継続する形で学習が始まります。

そこで、小学校では、一人ひとりの体験や経験を十分に生かしながら、「できた」「もっとやりたい」という意欲を育てられるようにしていくことが重要です。

④ 事例9をととしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

小学校入学前に、子どもが日常を過ごす環境には、「数や量」に関することが多く存在します。また、子どもは、そうした環境の中で、日々、直接的・具体的な体験をととして、数量に関する感覚を豊かにしています。

そこで、幼児期の体験や経験と小学校での学習内容をつなげるため、「かずのとびら」を窓口に、以下の4点を意識することで、子どもたちがⅢ期に円滑に進んでいくことができると考えます。

- 子どもが、具体的な生活の場面やこれまでの経験を想起し、イメージをもちやすいような言葉掛けをすること

- 何か困ったことや幼児が疑問に思ったことがあったときに、教師がすぐに正解を伝えたり、解決の方法を提示したりするのではなく、子どもが考え、様々なことを試したり、友達と考えを出し合ったりしながら、解決に向かう姿を見守ることを大切にすること

- 子どもの中に「必要感」が伴っていること

- 子どもの「こうしたい」という気持ちを大切に、考える機会を奪わないこと

あらためてⅠ期を振り返ると、Ⅰ期では、幼児が日常的に過ごす環境に「数や量」との出会いがあることを意識していく必要があると考えます。しかしながら、大人側が「気付かせよう、知らせよう」とあらかじめ準備しておくことをそのまま提示することは避けたいところです。予期せぬ偶然も予想される偶然も、幼児の気付きを待つ姿勢が重要となります。日常生活をととして「多い・少ない」「長い・短い」「重い・軽い」などに触れる場面や、その状況と言葉とが結びついて実感をともなった体験を積み重ねていくような関わりを大切にしていくことがポイントです。

自分で気付いたり、発見したり、それらを友達と共有しながら一緒に学習することの楽しさを感じられるような体験や経験が、Ⅲ期以降の学習へとつながっていくのではないかと考えます。

事例10 II期（1年生4月～5月）
算数科—単元「なかまづくりと かず」—

事例を読み取る
キーワード

・言葉掛け
・環境の構成

＜事例で伝えたいこと＞

ここでは、児童の気持ちを引き出す言葉掛けの工夫や、教室の環境の構成の工夫などから、「架け橋期」における算数科で大切にしたいことについて、実践を取り上げます。

幼児期には、生活の中で物の数を数え、自分たちに関係の深い数量などに親しむ体験や、安心して考えを伝え合う環境を体験してきています。

児童が安心して自分の意見を伝え合ったり、数に親しんだりできる言葉掛けや環境の構成について考えてみます。

① 単元 なかまづくりとかず「9は いくつと いくつ」（東京書籍 あたらしい さんすう1）

第11時／15時間

【目標】

- ・幼児期に育った数や量への関心・感覚を想起して、算数の学習への期待をもつ。
- ・ブロックなどを用いて、9の構成を理解する。

【担任教師が心掛けること】

- ・児童から出てくる言葉を大切にする。
- ・ブロックを使用していろいろなものを見立て、ものの見方を広げていく。

② 実践（1回目）

- ・児童は、教師の話をよく聞いて授業に取り組んでいるが、中には緊張感をもっている児童もいる。
- ・導入時、数ブロックで自分の好きな形をつくる活動では、思い思いにつくっていたが、担任が「遊びはここまで。学習を始めます。」と言うと、児童は、形つくっていたブロックを片付けて教科書を出す。
- ・数ブロックで「いくつといくつ」を分ける活動をし、教師の問いに児童が発表したことを順に板書する。担任とのやり取りを楽しんでいる児童もいるが、少し的外れな意見も出る。集中が切れてきた児童も出てきたため、体で動物の表現をしながら、「6はいくつといくつ」と数を唱える場面をつくっていた。

③ 実践後の協議会で話し合われた内容

1回目の実践から次のような意見が交わされた。

○幼児期の学びにおける自由度の高さを授業全体につなげるようにするために

- ・導入としてブロックでの構成遊びが取り入れられていることはよいが、「導入は遊び」「授業は学び」と区切られないようにしたい。「遊び」から自然と学習につながるような工夫が必要である。
- ・教師主体で進めるのではなく、児童の気付きや疑問を学級みんなで考え、解決する楽しさを感じられるとよい。例えば、幼稚園、保育園では、その時々の子の発言を受け止め、それに合った活動内容をその場で決めていくことが可能だが、単元の決まっている小学校教育では難しい。ただ、児童の発言がその日の単元内容からずれている場合は、後々考えることとして、それを書き留める場所が黒板にあってもよいのではないだろうか。
- ・より自由度の高い遊びを導入として取り入れると、数の勉強がより楽しく感じられるのではないだろうか。例えば、グループでたくさんのブロックを使い、構成をするなどである。2人組や、3、4人ほどでのグループで相談し合って進める活動は、幼稚園、保育園でも多く取り入れられており、児童がよりリラックスして授業に取り組めるのではないかとと思われる。

○教師と児童との関わり方について

- ・授業規律は大切であるが、児童の集中力を保つためにも、緩急をつけることが必要である。児童が、担任教師に対して親しみの気持ちをもてるようにしていきたい時期であることも意識するとよい。

○板書の工夫

- ・数の面白さや不思議さなどの児童の気付きが促されるような板書の工夫が考えられる。

【板書例】

		6は いくつ と いくつ	
■■■■■ ■		0	と 6
□■■■■ ■		1	と 5
□□■■■ ■			
□□□■■ ■		3	と 3
□□□□■ ■			
□□□□□ ■			

児童は、必ずしも数の順番通りに発表するとは限らない。

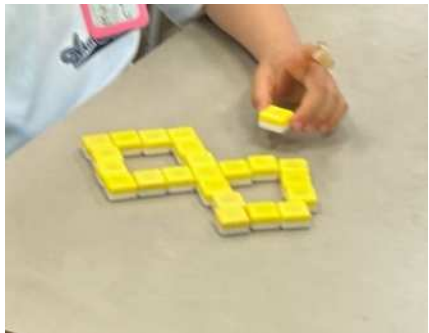
そこで、板書の際に、左図のように書いていくと、児童の気付きが促されるであろう。

【板書例】

		6は いくつ と いくつ	
■■■■■ ■		0	と 6
□■■■■ ■		1	と 5
□□■■■ ■		2	と 4
□□□■■ ■		3	と 3
□□□□■ ■		4	と 2
□□□□□ ■		5	と 1
□□□□□ □		6	と 0

④ 実践

1 回目の実践を改善し次時の授業に生かした。

		教師の言葉掛けと児童の様子(*T=教師 C=児童)
1	 	T「今日はここにあるブロックを使ってみよう」 T「ここから10個、取りに来てください」 C「みんなでいったら取りにくいんじゃない？」 T「どうしたらいいかな？」 C「何号車って言ったら？」 T「何でそう思ったの？」 C「そうしたら、ぎゅうぎゅうしなくていいから」 ・順番で取りに行くといよい方法を伝えている ・担任の「なぜ？」の問いかけで自分の発言の意味や行動する方法を考える機会をつくる。 T「10、数えられるかな。」 T「まだ余っているの、次、5個取りに来てください」 ・その後、それぞれが自分で数を数えて自分の席に持っていく。(23個のブロックが渡る。)
2		T「何の形ができるかやってみよう」 C「ムゲン」「リコ(自分の名前)」「僕の名前、タカ」 「びっくりマーク」「ゲーム」など ・児童から様々な発想がブロックで表現されている。 T「いろいろなのができたね」 T「お友達のも見てみる？」と席を立ち、友達のつくった形を見にいったよいことを促すと、見に行く児童もいた。 T「(今日の学習に使う)9個残しておいて、残りを全部戻してください」
3		T「今日は、「9はいくつといくつかな」をやってみよう」 T「9は、ちょっぴんすると、いくつといくつかな」 C「1と8」「2と7」「3と6」など答える ・教師と学級全体でやり取りが交わされる

4		T「教科書を出しましょう」 「9はいくつといくつ」のところを書きましょう」 ・子どもたちはそれぞれ絵を見て教科書に書き始める ・このとき、頭で考える、指で数える、ブロックを使って考える児童がおり、個人差がある。 ・ブロックの使い方も、実物を使う、教科書の挿絵のブロックを数える、ブロックを縦に置く、横に置くなど様々な考え方が見られた。
5		T「終わった人は、自分たちでいくつといくつをやってみましょう」 T「お隣さんも見てみて」 ・隣の人、近くの人など目を合わせて、「いくつといくつ」を繰り返す児童、本時の学習とは別のことをしている児童もいた。 ・机上の教科書があるとブロック操作がしにくいので、机上をブロックだけにするなどの配慮も必要。 C「一緒にやろう。」 C「9はいくつといくつだ。5と？」 C「いくつかかくすから目をつぶって。」 子どもたち同士で工夫し、クイズを出し合っていた。

⑤ 実践をととして

○よかったと思われること

- ・児童の言葉を聞き、児童への言葉掛けを大切にしていた。
- ・本クラス（＊5）になって2日目だが、学級の雰囲気がとてもよかった。特に、配慮が必要な児童の様子を教師がよく見ており、教師との信頼関係を感じた。

○さらにひと工夫するとよいこと

- ・45分の時間配分について、最初のブロックで遊ぶ時間が長く感じた。ブロックで遊ぶことについても、どのような経験をしてほしいのかを考えて行くとよい。
- ・ブロックという具体物の操作について、もっと具体の操作を大事にしてもよいのではないか。

＊5 本クラス…港区では、令和3年度より試行的に、小学校第1学年の学級編成の際の「プレクラス」制を導入。令和7年度より全小学校で導入。プレクラスで過ごしたのち、児童の実態に応じて再編成したクラスを本クラスとし、正式な学級で5月当初よりスタートする。

- ・「頭で考えてもよい」という言葉を掛けると、「頭で考えることの方が価値が高い」と誤解し、ブロックを使用して数えることにじっくりと取り組みにくい。半具体物の操作を取り入れなくてもできてしまう児童もいるが、Ⅱ期の時期では、ブロックの操作を十分に取り入れることによって、「かず」の概念が明確になってくるため、半具体物を使って数を数えることは恥ずかしいことではないことを教師自身が十分に理解し、前に出てきて黒板の前で操作を行う、机上で行うなど、折々の場面で半具体物の操作を取り入れていくとよい。
- ・「算数」の時間なので、算数の用語を意識的に使うようにする（本時は、「いくつと　いくつ」の単元のため、「いくつと　いくつかな」）。また、次時の学習につながるようにするために、何をどうするのか、具体的に言葉掛けができるとよかった。実際には友達同士で、本時の学習のまとめになるように何をどのようにするという指示の言葉掛けがわかりやすくてできるとよかった。
- ・「隣の人」という言葉掛けがあったが、一人がけの席では理解しにくい。どの人が隣りなのか分かる指示の出し方も考えられる。

⑥ 今後に活かす算数につながる架け橋期のポイント

本時を振り返り、授業の改善に向けて整理したところ、以下の4点があげられました。

- ・学習がわくわくするような導入の工夫
- ・授業の中で、どのような表現も受け止めてくれる担任教師の関わり
- ・自分一人だけではなく、友達の存在を感じて取り組める二人組、グループになるなどの環境
- ・具体物（ブロック）の操作と算数用語（今回の授業では「いくつといくつ」）を意識的に行うこと
これらをさらに意識して授業改善を行うことが考えられます。

⑦ 架け橋期のポイントを生かした、その後の児童の様子

- ・二人組や四人組での活動を普段から行う場を設定することで、児童の意見交換が活発に行われるようになった。児童からは幼児期はこの形が多かったとの声があがる。少人数での意見交換ができるようになると、安心感が芽生え授業中の挙手・発言も増えた。
- ・児童の会話が増えることで、授業中の気付きや活動を共有しながら学習が進むようになった。（一人で違うことに取り組んでいる児童が減った。）
- ・活動や学習内容の理解を深めるときに、児童の表現を生かすことで教師の教え込みにならず、児童の自力解決の力につながった。
- ・いつでもブロックの10個を机の上に置いておくことで、「ブロックを使って計算する。」「ブロックを使って見直しをする。」など、自分の学習に合わせたブロックの使い方を身に付けた状態で足し算の学習に入ることができた。

⑧ 事例10をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

本事例から、幼児期の「遊びの中から学ぶ」から「総合的な学び」につながる指導の展開が重要だということが分かります。

幼児期の体験や実生活の経験を生かし、安心して発言ができる言葉掛けや、新しい考えを生み出

す喜びを味わうことのできる活動を計画することが大切です。そのためには、児童の経験に基づいた活動やゲーム要素を取り入れた活動を行ったり、教師と児童の一問一答にならない少人数で学習が進む場面をつくったりすることが考えられます。

そして、Ⅱ期の終わりからⅢ期にかけては、扱う数が大きくなったり、十進位取り記数法を用いたりすることが始まります。数が大きくなっても「これまでの経験を生かして考える」「友達と解決する方法を見つける」などの、Ⅱ期までの経験を土台にして新しい学習に取り組むことができると考えます。

このような児童の学習の姿から、Ⅰ期を振り返ってみます。

あらためて、遊びや生活の中で、必要感をもって人数や物事を数えたり、量を比べたりすることが重要と考えます。例えば、収穫物を数える（全部で○個／何個ずつ食べられる／何人にあげられる）チームの人数を均等にするために数える、勝敗を知るために数えるなどがあげられます。また、一つずつだけでなく、2人組、または4人ほどのまとまりでとらえる機会も遊びや生活の中に見出すことができます。さらに数だけでなく、製作のための折り紙や積み木など、形、大きさ、長さなどの違いに気付いたり、必要感をもって分類したりできるようにすることなどがⅡ期以降の学びにつながると考えられます。こうした学びのつながりを意識して、実践することが重要です。

事例11 II期（1年生6月～7月）

生活科を他教科とつなげる
— 単元「なつと ともだち」 —

事例を読み取る
キーワード

・生活科を中心
とした指導
・他教科との
関連

<事例で伝えたいこと>

この事例では、教科「生活」と、「国語」や「算数」などの他教科とを、どのように関連させながら授業を進めているのかを取り上げます。

子どもたちは幼児期に遊びや生活を通して、資質・能力を育んできました。小学校に入学すると、学習活動を中心とした生活が始まります。子どもたちの「やってみたい。」「どうしてだろう。」という思いや願いを様々な学習の中で実現化していく生活化を中心とした合科的・関連的な指導について考えてみます。

① 「生活科」について

生活科は、具体的な活動や体験をととして、自立への基礎を養うことを目標とした教科である。体験的な活動や表現活動を重視した教科であるため、幼児期の教育を継承しやすいこと、また特徴として、各教科等の要素と関連が多く含まれている教科である。中学年・高学年の各教科等にも接続しやすい教科でもある。これらの特徴から、生活科は各教科の中心と位置付けられる。

② 内容

○単元 「なつと ともだち」（光村図書） /11 時間 中心となる内容（5）季節の変化と生活
【目標】

夏の自然と関わる活動をととして、身近な自然の違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

【担任教師が心掛けること】

- ・ 幼児期の経験は一人ひとり異なるが、園での多様な経験を引き出しながら、それを共有し、興味を広げていくとともに、「こんなことをやってみたい」という意欲がもてるようにする。
- ・ 遊具や用具など、遊ぶために必要なものを使い、自由感をもって取り組めるようにしたい。

【幼児期の経験を生かす工夫】

- ・ 夏らしいことや物、したことのある遊び、これからしたいことについて出し合う。
- ・ 「夏みつけ」をする中で、春に学校探検をしたときことを想起させながら、どんなものと触れ合うことができるか把握し、春との違いに気付けるようにする。
- ・ 見付けたことや気付いたことをグループの友達と伝え合い、表現できるように促す。

③ 本時での教師の言葉掛けと児童の様子（T＝教師 C＝児童）

<導入の場面>

（休み時間明け）

- C 暑いね。走ったら汗をすごくかいた。喉も乾いたよ。
- T すごい汗だね。暑かったね。
- C この間まで、雨が降っていて外で遊べなかったから、晴れているだけいいんだけど。
- C テレビで梅雨が明けたって言ってたよ。
- T 梅雨が明けると暑くなるんだね。
- C 夏になったんだよ。
- T そうか。みんなが入学した時は春だったのにね。
- C 春から夏になったんだよ。
- T 何か違うところがあるのかな？
- C 暑いし、夏休みもあるよ。私の誕生日もあるよ。
- T 春に「春となかよしになろう」って、みんなが名前をつけてくれた勉強をしたね。
- C 夏もやろうよ。桜の花とかチューリップもないし（春と様子が）全然違うよ。

<児童の気付きを取り入れ生かす>

- C 夏は七夕もあるよ。幼稚園でも七夕やったよ。
- T 学校でも去年、七夕したんだよ。
- C 今年もやる？折り紙で飾りつくりたいな。
- T 他にも七夕でどんなことしたの？
- C 七夕の歌、歌ったよ。
- 「さきのは さらさら～」児童が歌いだしたり、体で表現したりしはじめる。
- C 短冊も書いてみようよ。
- C 短冊はみんなが見るから、綺麗な字で書こう。
- C お願いの言葉だから「○○○してください。」に（文末を）した方がいいかな。
- T そうだね。
- C 何で七夕があるのかな。先生何で？
- T みんなのタブレットで調べてみようか。（ICT 機器の活用）どんどん出てくるね。
- 七夕にやってみたいことをみんなでやってみようか。
- C 夏のことをたくさんやったら初めてやったこともあって楽しかったな。

④ 「生活科」と他教科とのつながりを考えた「架け橋期」のポイント

授業の中で児童から出た発言を受け止め、次の活動につなぎながら、学びを展開していくことが大切である。単元配列表（次頁参照）を活用し、教師が各教科でどのような資質・能力を育成したいのかを意識し、児童の意識の流れを想定して学びを展開することが重要となる。

*単元配列表

生活科の単元を中心として他教科等との合科的・関連的な指導の工夫について考える際には、生活科の単元の主たる学習活動とのつながりを考え、単元を配列した表を作成する。

<単元配列表>

各教科等						
国語	つぼみ	あいうえおで あそぼう	おおきな かぶ	すきなもの なあに	こんなことが あったよ	としょかんと なかよし
算数	あわせていくつ ふえるといくつ		のこりはいくつ ちがいはいくつ		どちらがながい	
生活	なつとともにだち					
音楽	はくについて りずむをうとう			こころのうた		
図画工作	ちょきちょき かざりをつくろう	やぶいたかたちから うまれたよ	からふる いろみず	なつのオリジナル Tシャツをつくろう		
体育	体づくりの運動		水遊び			
道徳	げんきでね あげはくん	めだかのめぐ	かぼちゃの つる	はやとの ゴール		
国際	Fruits and vegetable			Animals		
特別活動	音楽朝会 七夕	プール開き たのしいプール	1 がっきを ふりかえろう		たのしい なつやすみ	

⑤ 事例11をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

本事例からは、幼児期の経験を生かして生活科や他教科を進めることで、自分たちが主体的に提案、計画、準備、実行をすることにつながるということがわかります。そのような経験が、「もっとやってみたい。」という気持ちにつながっていきます。そして、全教科の各活動の中で試行錯誤しながら、思いや願いを実現していく力が育っていきます。

次に、Ⅲ期を見通して考えてみます。学習をとおしてたくさんの活動や経験をする中で、自分が

したことを友達に知らせたいという思いが出てきます。この気持ちを実現する方法として発表の仕方やまとめ方を学んでいきます。また、友達と交流し合うことで友達のしたことを取り入れてやってみたいという気持ちも生まれます。繰り返し活動を行うことで、自分の思いを提案したり、準備・計画の仕方を身に付けたりしていきます。学習の中で、自分の意見を話すだけでなく、友達の意見を取り入れたり、自分の意見を調整したりする姿も見られるようになります。

次に、Ⅱ期やⅢ期の姿から、Ⅰ期を振り返ってみます。

子どもたちの発言から季節を感じる遊びや年中行事に親しむ経験をしてきたことがわかります。自分の経験や気づきを伝え、お互いの意見をどのように調整していったらよいのかも幼児期の経験が生きていると感じることがあります。子どもたちの経験や気づきがすべての学習につながっているのです。



解説

生活科と他教科とをつなげる

生活科と他教科とを
関連付けるとは？

東海大学児童教育学部 准教授 寶來 生志子

これまで、国語では「話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと」、算数では「数」に着目しました。学習指導要領の「生活科」の中で、言葉や数について国語や算数とどのように関連付けているのか、生活科の考え方について解説します。

1 生活科の目標

生活科の目標は、次のとおりである。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働き掛け、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

※今回の学習指導要領の改訂では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理している。

2 具体的な活動や体験をとおして学ぶ

生活科は、具体的な活動や体験を通して学ぶことが大切だと言われている。それは、思考と表現を一体化して学ぶこの時期の子どもたちの発達の特徴から考えられた。対象と直接関わり、対象とのやり取りをする中で、資質・能力が育成されることを目的としているのである。

したがって、具体的な活動や体験の充実を促すとともに、言葉などによる振り返りや伝え合いの場を適切に設定することが大切である。

3 低学年教育の充実と生活科の位置付け

今回の改訂では、これまで以上に低学年教育の充実が求められている。心と体を一体的に働かせて学ぶ低学年の特性から、幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、具体的な活動や体験を通して感性を豊かに働かせるとともに、身近な出来事から気付きを得て考えることが行われるなど、中学年以降の学習の素地を形成してということが重要である。

低学年における教科等の学習は、発達の段階等を踏まえて、互いに関連付けて展開することが大切である。生活科においても、他教科等との関連が求められ、その指導に当たっては、これまでも、低学年教育全体を視野に入れることが求められてきた。今回の改訂では、これまで例示されてきた国語科、音楽科、図画工作科はもちろんのこと、低学年の全ての教科等と生活科との関連を図り、指導の効果を高めていくことが求められている。このことは、児童の意識に沿った活動を展開する上でも、積極的に取り組む必要がある。

今回の改訂では、幼児期の教育から小学校、中学校、高等学校までを含めた全体を見通し、育成を目指す資質・能力を整理してきた。あわせて、幼稚園教育要領等において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がまとめられ、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続を図るための手掛かりが示された。この手掛かりを基に、小学校入学当初において生活科を中心としたカリキュラムのデザインを行うことで、小学校へ入学した児童が、安心して学校生活を送るとともに、自信をもって成長し、学習者として確かに歩んでいくようになることが期待される。

このように、生活科は、教科等間の横のつながりと、幼児期からの発達の段階に応じた縦のつながりとの結節点であることを意識することが重要である。

4 他教科等との関連

生活科と他教科等との合科的・関連的な指導を行ったり、低学年の児童の生活とつながる学習活動を取り入れたりして、教科等横断的な視点で教育課程の編成、実施上の工夫を行うことが重要である。

ここでいう合科的な指導とは、各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて、学習活動を展開するものである。また、関連的な指導とは、教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するものである。

他教科との関連を図った指導の在り方として、具体的には次のようなことが考えられる。

① 生活科の学習成果を他教科等の学習に生かすこと

例：生活科における豊かな体験を、国語科における報告する文章や記録する文章などを書く言語活動、日記や手紙などを書く言語活動などの題材として活用する。

② 他教科等の学習成果を生活科の学習に生かすこと

例：算数科での長さの単位について知り、測定の意味を理解することや身の回りにある数量を分類整理し、簡単な表やグラフを用いて表したり読み取ったりするなどの知識、技能が、生活科の野菜などを育てる過程で、茎やつるの長さの変化を記録したり、花の数や収穫した野菜の数などを整理したりする際に発揮され、栽培活動における気づきを確かなものにしていく。

③ 教科の目標や内容の一部について、これを合科的に扱うことによって指導の効果を高めること

例：児童が生活科における活動を歌や踊り、劇によって表現する単元の際、国語科、音楽科、図画工作科、体育科等の目標も効果的に達成する。

一人の児童の学びは個別の教科内で閉じるものではなく、それぞれの学びが相互に関連付き、つながり合っている。生活科と他教科等において、学んだことがどのように関連付いていくのかを意識し、児童の思いや願いを生かした学習活動を展開するために、1年間の全ての単元を配列し、それを俯瞰することができる単元配列表の作成が効果的である。

事例12 II期（1年生6月）

特別活動

「みんなのためになる かかりをかんがえよう」

事例を読み取る
キーワード

・主体性
・必要感

<事例で伝えたいこと>

この事例では、保幼小合同研修会で、小学校1年生が「特別活動」の公開授業を行い、その後協議をするという事例を取り上げます。

子どもたちは、園で当番や係の仕事をしてきています。それらの幼児期の体験や経験の話から、学級の係の仕事について、自分たちの学級にはどのような係（仕事）があったらよいのかを、考えを出したり、友達の考えを聞いたりして、担任と学級の子どもたちとで話し合う過程について考えてみます。

① 保幼小合同研修会の概要

今年度の保幼小合同研修会について、事前に、学区域内の各園・学校の保幼小連絡コーディネーター、管理職で内容を検討してきた。

幼児教育関係者は、これまで小学校入学当初の授業の様子や児童の姿を見る機会があまりなかったため、スタートカリキュラムや「育ちや学びを生かす」ことについて、理解を深めるため、講師を招聘し、授業参観及び協議会を実施することとした。

② 方法

○小学校第1学年の授業を、保育士、幼稚園教員が参観する。

○小学校での経験のある講師を招聘し助言を受ける。

○役割分担

- ・授業公開、指導案（略案）の準備 …小学校
- ・協議会司会 …区立幼稚園の保幼小連絡コーディネーター
- ・グループ協議のファシリテーター …区立幼稚園の教員
- ・時間の調整 校長、各園長
- ・これらを域内の保幼小連絡コーディネーターを通じて、周知

○時程

- ・公開授業 午前11時35分～12時20分
- ・協議会 午後 1時45分～ 3時30分

・あいさつ		区立幼稚園長
・授業者自評	(10分)	第1学年担任
・グループ協議	(20分)	
・グループ協議報告	(10分)	
・指導・助言	(45分)	講師 東海大学 准教授 寶来 生志子 氏
・お礼		区立小学校長

③ 協議の視点

- ・公開授業後の協議のテーマは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「言葉による伝え合い」とし、事前にワークシートを作成し、「本日の授業の場面から」「幼児期の育ち体験から」「幼児期の育ちを引き出す教師の問いかけ」について協議を進めた。
- ・事前に作成したワークシート（79項参照「ワークシートの例」）活用し、3グループ（1グループ6、7人）に分かれ、協議を進める。

④ 実践

○教科等 特別活動「みんなのためになる かかりをかんがえよう」

【目標】

- ・今までの経験をもとに、学級の児童が生活しやすく学校生活が楽しくなるための活動を出し合い、係を考える。

【担任教師が心掛けること】

- ・お互いに認め合える学級づくりを目指す。
- ・学習のルールを設定する。（例：話の聞き方「あいうえお」など）
- ・児童が良い行いをしているのを見つけたときには、その場で褒める。
- ・児童が見つけた良い行いを教師に伝えたときは、代わりにその児童に伝える。
- ・失敗したときも「みんなのために良い間違いをしてくれたね」と伝える。
- ・感謝の言葉を伝えられるように声掛ける。
- ・友達同士で教え合ったり助け合ったりできるように声掛ける。

【授業の様子】

		教師の言葉掛けと児童の様子（* T=教師 C=児童）
授 業 前		T 授業が始まるまでの時間、絵本の読み聞かせをする。 チャイムがなり、「今日はここまでね」と教師が絵本を逆さまにしておくと、児童から「それじゃ本が傷んじゃうよ。しおりを挟んでおいたら？」と言う。 T 「そうだね。いい考えだね」と受け止め、授業が始まる。
1		T 「今日は、みんなで係を考えよう」 T 「みんなは幼稚園や保育園のとき、どんなかかりをしたことがありますか？」 C 「ごみを集める係をしていたよ」 C 「テーブル拭きをしていたよ」 C 「亀のお世話もあった」 C 「それ、私もやったことある」 T 「いろいろなことをしていたのね」 ・児童たちは、次々に自分の経験したこと、知っていることを次々と話す。

2		T 「このあいだ、クラスの目標を決めたよね。このクラスで、どんな係があったらいいかな。」 T 「みんなのためになる係について考えてみよう」 C 「なかよくする」 C 「たのしくする」 ．．．． ・児童の意見を受け止め、板書で文字にしていく。 ・抽象的な意見が多くなってくるが、担任は、一人ひとりの考えを受け止め、板書する。
3		・意見が出にくくなってきたため、友達と相談することを促した。 T 「二人組で考えてみようか」 ・すると、自分たちで考えを出し合う姿が見られた。
4	黒板いっぱいになるくらいに考えが出された。	T 「たくさん、考えることができたね。」

⑤ 協議会

協議会では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「言葉による伝え合い」をテーマにして協議を進めました。

○自評

- ・今回の授業では、幼保の経験を思い出すという流れを考えたが、考えが出尽くした後、意見が出なくなってしまった。実際にやってみて難しいと思いました。
- ・自分が経験したことは、「話したい」「伝えたい」という気持ちがあるが、「どんな係があったらいいか」という問いは、少し抽象的だったようなので、途中から、一人で考えるのではなく、友達と考え合えるようにしてみました。

○グループでの協議

授業者の自評を受けて、各グループで協議を進めました。

〈A グループ〉

「本日の授業の場面から」

- ・「何を言っても大丈夫」という1年生の学級の雰囲気の中、発言がされていた。友達の話をよく聞き、発言に対しての返しがあり、伝え合いの姿となっていた。

「幼児期の育ち体験から」

- ・園では、降園前などに学級全体の人々に向けて話す場面を工夫している。楽しんだ遊びについて自信をもち話せるようにする、円座になる、その子なりの発言を受け止める教師や友達の雰囲気を大事にするなどの工夫をしている。

「幼児期の育ちを引き出す教師の問いかけ」

- ・園では、今後も教師が発信した言葉掛けが幼児に届いているのかを、表情や動きを見ながら工夫していきたい。
- ・小学校では、児童の受け止めや理解を何段階も考え、もっとやり方を工夫する必要がある。

〈B グループ〉

「本日の授業の場面から」

- ・発問に対して、自分が経験したことについては言葉にして伝えやすく、積極的な発言となっていた。教師が児童の気持ちを受け止めることで話がしやすく、よく聞いている姿を認めることで、聞く意識が高まっていた。

「幼児期の育ち体験から」

- ・児童は、園で経験してきた「当番」のイメージで話をしていたと思われる。小学校の「係」につながるような「経験」や「やりたい気持ち」があると、話し合いがより具体的になったのではないかな。

「幼児期の育ちを引き出す教師の問いかけ」

- ・経験したこと、考えていることを言語化できるよう、肯定的に気持ちを受け止める、個々に応じた援助をすることが必要である。また、経験を踏まえた発問をする、聞いてくれている児童への受け止めや価値付けが大事である。

〈C グループ〉

「本日の授業の場面から」

- ・児童の発言を教師がひろいつなげていた。話し合いのルールができていて、教師の肯定的な言葉掛けもあり、友達の発言を聞く姿勢があった。
「係」から「当番」にキーワードが変わると、具体的なイメージが出てきた。経験したことがあることで、話し合いが具体的になったと思われる。
- ・話し合った内容を、言葉や文字だけではなく、絵も活用しながら記録することで、話し合いが見える化し、伝え合いの充実につながるとと思われる。

「幼児期の育ち体験から」

- ・園では、自分たちの遊びや生活の中で必要なことを当番としてきた経験がある。話の内容を理解したりイメージしたりしやすいように、その日の出来事を話題にしたり絵や写真を使うなどして、意図的な話し合いの工夫をしている。自分の思いや考えを、嫌なことも含めて言葉で表せるように援助している。

「幼児期の育ちを引き出す教師の問いかけ」

- ・一人で考えさせるだけでなく、友達と話す時間をつくることで考えが広がるのではないかとと思われる。話し合った内容を、言葉や文字だけではなく、絵も活用しながら記録することで、話し合いが見える化し、伝え合いの充実につながるとと思われる。

⑥ 協議を経て

協議会の報告や講師の先生からの助言を経て、言葉掛けや関わり方を改善してみました。

「こんなふうに改善してみた！」・・・授業者より

- ・学級の「当番」について、研修会の際に、幼稚園や保育園で使用していた言葉で「仕事」という言葉の方がなじみがあるのではないかという意見がありました。その方が、理解しやすいということから、「仕事」という言葉に言い換えてみました。実際に、「自分ができること、やりたいことをやろうね」と投げかけると、自然に自分たちから「やりたい」という声が聞かれるようになりました。
- ・日直の仕事は、最初は、担任が行っていましたが、子どもたちから「日直もやりたい」という声があがり、やってみることにしました。「一人でやるのは心配」という意見から、二人ずつでやることにしました。さらに、「どういう順番でやろうか？」という話になったため、「隣の人と順番でしよう」など、やり方も子どもと一緒に決めました。
- ・仕事については、「ほかにもやりたい」「いろいろ（仕事の種類）をできた方がいい」などの意見も出てきているので、6月になって新しい係を考えている姿も見られるようになりました。

⑦ 今後の指導に活かす架け橋期で大切なこと

【講師の先生の助言】

授業の始まりの前に絵本の読み聞かせをしていた。授業の始まりとともに、「今日はここまでね」と教師が絵本を伏せると、児童から「それじゃ本が傷んじゃうよ。しおりを挟んでおいたら？」との提案がある。担任はその言葉を受け止め、「いい考えだね」と取り入れた。このような子どもとのやり取りの一場面からも、幼児期の体験が想像される。

第1学年を通じて、大切にしたい以下の主な4点について考察する。

- ① どれだけ子どもの立場に立っているか
- ② 子どもが考える授業になっているか
- ③ 試行錯誤できる環境の構成になっているか
- ④ 教師の言葉掛けはどうか

【幼児期に体験・経験したことを引き出す言葉掛け】

「教えて」「聞かせて」「みんなで考えよう」
子どもたちに本気の質問を！

- ・幼児期の経験として、「どのようなことをやっていたの？」という経験を引き出す言葉掛けによって、児童は、園生活の中での経験を思い出しながら、経験したことや知っていることを言葉にして伝えていた。その内容は、当番や係など、園で様々な経験をしていたことは学級の中でも共有できていた。幼児期の体験を引き出す言葉掛けは、子どもたちが発言するきっかけとなったが、その言葉掛けを糸口として、教師がその先の展開を予想して、学習を進められるようにしていく必要がある。

【児童が必要感をもって取り組めるような働き掛け】

必要感が感じられるような、園での学びを生かした活動を！

- ・経験したことを言葉に出して話そうとする姿が多く見られた一方、授業のねらいである「みんなのためにどのような係があったらよいか」という問いに対しては、「係」という概念の理解には至っていない様子で、具体的な「係」の取組まで結び付けて考えることは難しかった。
例えば、「クラスにはどんな仕事があるかな？」「先生は今、日直をしているよ・・・」など問いかけてみると、取組の内容が具体的にイメージがわくのではないか。「先生は今、毎日、日直をしているけれど、先生は忘れてしまうことがある、どうしよう？」などきっかけづくりはいろいろ考えられるが、「必要感」を感じられるように話を進めるなど方法が考えられる。

【子どもの気持ちを理解する】

「子どもの立場に立って考える」
の姿勢を大切に！

- ・子どもたちの考えが行き詰ってしまう場面では、教師は、児童に近くの席の友達と相談することを促した。一人で考える時間だけでなく、友達と考えを交わす時間を確保することで、安心して取り組める児童もいる。教師対子どもの伝え合いのみならず、子ども同士で伝え合う機会をつくり「みんなで考える」という学級の雰囲気づくりも心掛けたい。

「幼稚園・保育園での学び」から「小学校での学び」へバトンを受け継ぐ

港区立麻布小学校 校長 宮島 淳一

○研修会での本研究授業のねらい

今回の研修会での小学校1年生の研究授業では、学級活動で「みんなのためになる係を考える」内容でした。幼稚園・保育園で経験した係活動や当番活動を想起させながら、学級の係活動につなげていくというものです。小学校の学級活動として係活動と当番活動がありますが、子どもたちが幼稚園・保育園で経験している係を整理して小学校の学級活動における係活動と当番活動に位置付けていきます。授業後の研究協議会にて参加された近隣の幼稚園・保育園の先生から活発な意見交流がありました。

○令和の幼保小の「架け橋プログラム」のめざすもの

意見交流後、東海大学准教授の寶来生志子先生から指導・助言がありました。5歳児から小学校1年生の2年間を架け橋期とし、令和4年度から国は「幼保小の架け橋プログラム」を実施しているとのこと。この架け橋期においては、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことをめざしていることを知りました。プログラムの実践例として、小学校第1学年の授業の実践の動画を先生から紹介していただきました。

○「幼稚園・保育園の学び」から「小学校の学び」へバトンを受け継ぐ

動画の授業では、児童の経験や思いを大切に、実際に現場に行き確かめ、児童が課題をもって生き生きと活動していました。一人ひとりが課題をもって解決に向かって協働的に取り組む姿は、まさに本校が今、研究している内容です。個別最適な学びと協働的な学びを大切に、主体性を育むことの追究は、架け橋プログラムから小学校・中学校まで一貫している学びであることを改めて知ることができました。



コラム 「当番」と「係」は同じ？違う？

園では、「お休み調べ」や「給食当番」、「水やり当番」など、様々な当番活動をしています。それは、最初から、「当番をやろうね」と教師から活動を提示されて行うものではありません。「当番」だからやるのではなく、園の生活の基本となる、幼児の「やりたい」「やってみたい」という気持ちが重要です。そのきっかけはいろいろありますが、「先生のお手伝いをしたい」「お手伝いができてうれしい、だからまたやりたい」など、幼児の思いにこたえるものや、お花に水やりをしないと枯れてしまうから水をやろうなど、幼児が気づき、必要感が生じて、自分たちの生活に必要なこととして、取り入れるなど、いずれにしても幼児の思いがきっかけとなります。このほか、以前の5歳児年長組がしていた当番を思い出すなどをきっかけとして、必要な当番を考える場合もあります。

このように、「やりたい」という思いが出発点でありながらも、「生活に必要なこと」として取り組むようになるのが「当番活動」です。

また、園では、「係」にも取り組んでいます。例えば、誕生会や運動会などです。行事の際に、5歳児が司会などを担当することがあります。これは、その会をとおして、幼児に経験してほしいこと明確にして、幼児たちができることを考えて取り組んでいます。これも、以前の5歳児年長組がしていたことを引継いで取り入れている園が多いと思います。

園では、「当番活動」も「係活動」も、いずれも「園で決められているからやる」ではなく、「やりたい」「やってみたい」という気持ちから、必要感をもって取り組めるようにしています。小学校ではどうでしょう。

当番活動と係活動には明確な違いがあり、小学校学習指導要領（平成29年告示）では、「係活動は、学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらい」としています。つまり、楽しく豊かな学級生活づくりをするために子どもの発想を取り入れながら行うのが「係活動」です。

「当番活動」は、「他の児童と力を合わせて働くことの大切さや自分のよさを生かすことについて考えることができるようにするとともに、自分の仕事に対して工夫しながら役割を果たすことができるようにすることが大切である。具体的には、学級全員で分担する清掃や給食、交替しながら行う日直、飼育、栽培等～（後略）」と示されているように、日常の生活の中で継続して行う必要のあるものを当番活動としています。

「当番活動」も「係活動」も必要感をもって取り組むことや、自分たちの生活をよりよくするという点は共通しています。ただし、言葉がもつ概念の理解は、まだ架け橋期の子どもにとっては難しいものです。

また、幼稚園・保育園での「係」の意味合いと、小学校でいう「係」の意味合いは、ニュアンスが少し異なるようです。

それぞれが、子どもの発達を理解した上で、子どもに馴染みのある「当番」「仕事」などの言葉を使い、全てのこどもが理解できるように必要に応じて話や絵などで知らせていくことが大切です。

⑧ 協議会を進めるためのワークシートの例

研修会では、各園・小学校が、互いの時間を調整して参集やオンラインによる協議の時間を設定しています。限られた時間を有効に活用し、協議を円滑に進めるためには、協議の視点を明確にしたワークシートを作成して、活用することも考えられる。

「ワークシートの例」

令和6年5月15日(水)

令和6年度【麻布小学校区】保幼小合同研修会 協議用

所属（

）お名前（

）

テーマ「言葉による伝え合い」

(1) 今日の授業の場面から伝え合いの姿を読み取りましょう
⇒ 気付いたことをかきましょ

(2) さらに幼児期の育ちを読み取りましょう
⇒ 幼児期にどのような体験をしているのかを深堀りします

(3) 幼児期の育ちを引きだす教師の問いかけについて考えてみましょう

(4) 今後、それぞれの立場で自分たちが工夫できることを考えてみましょう

2 研修の振り返り

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにテーマや視点をしぼると、協議しやすくなる。

気付いたことを出し合うことから、徐々に「体験」を読み取ることができるようにする。

今回は、小学校が授業を公開している。園の保育を公開する場合も、どちらの場合でも、それぞれの立場から、どのような工夫ができるのかを考え、自分事として振り返りをする。

⑨ 事例12をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

この事例は、保幼小合同研修会での実践です。二つ目の視点から考えてみます。

まず、一つ目は、「特別活動」の学習についてです。

担任教師は、本学習をとおして、学級の児童が生活しやすく学校生活が楽しくなるための活動を出し合い、係を考えてほしいと計画しました。授業の初めには、幼児期の体験を引き出すような言葉掛けで、子どもたちは自分たちの経験していることや知っていることを、「話したい」「伝えたい」という気持ちで発言していました。担任は一つ一つの発言を肯定的に受け止め、話しやすい雰囲気をつくっていました。

ところが、「みんなのためになる かかり」を考える場面では、小学校での係の経験がない子どもたちにとって、イメージがもちにくく、戸惑いを感じている様子が見られていました。まだ、「みんなのために」や「かかり」について、必要感をもてていなかったことが考えられます。まずは「やりたい」と思われるような活動があったり、具体的に自分たちの生活の中で困っている場면을話題にしたりすると、イメージを想起しやすかったのかもしれない。

この実践からⅢ期に向けて、どのようなことが大切なのかを考えてみます。

児童と担任教師の関わりでは、引き続き、担任への安心感や信頼感を土台として、どのような発言も肯定的に受け止め、担任が「みんな話を聞かせて」「教えて」などの温かな関わりをモデルで示すことで、どの子どもにも、話を聞こうという態度が育まれていくと思います。

「かかり」の話し合いでは、子どもたちが「やりたい」「やってみたい」という気持ちをもてるようにするためには、活動などをさまざまな場面で実際に子ども自身が体験できるようにしたり、働き掛けたりすることが大切です。例えば「やってみたい人いる？」という機会を設けることで、順番や方法についても考える機会になります。「やってみたい人が多くて困った」場面も生じるかもしれません。そのような場면을学びの機会と捉え、「どうしたらいいかな」「何かいい考えある？」と話題にするなどし、子どもと共に一緒に解決していく体験を積み重ねていくことで、自分たちのよりよい生活をつくることにつながっていくと思われます。

次に、この実践からⅠ期を振り返ってみます。

園では、「当番」や「係」など、最初は「仕事」という位置付けではなく、単に「やりたい」からやる、という子どもの思いから始めることが重要です。その後、少しずつ必要感をもって取り組めるように、なぜ取り組む必要があるのか、「当番」をやらないとどうなってしまうのかなど、生活の場面を捉えて、移行していくことが大切です。当番の順番、手順などは、最初から決まっていることは何ともありません。担任と一緒に考えていくことが、「自分たちでよりよい方法を考える」力になっていき、小学校で、よりよい生活をつくろうとする姿につながっていくと思われます。

二つ目は保幼小合同研修会についてです。

保幼小合同研修会は、協議を通じて、幼児期の教育と小学校教育の両者の教育について理解を深めたり、両者が抱える教育上の課題を共有したりする機会になります。今回の研修会では、園長・

校長のリーダーシップのもと、保幼小連絡コーディネーターを中心に域内のコーディネーターが窓口となって内容や時間について連絡を取り合い、準備から当日の役割分担など計画的に進めることができました。

そして、元小学校校長の経験のある講師を招聘したことによって、スタートカリキュラムの理解や第1学年の公開授業の指導助言を伺うことによって、参加した全員が大切なことを共有できたことは、小学校にとっても保育園・幼稚園にとっても、大切にしたいことを確認でき、理解が深まりました。

また、相互理解を深める方法として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「言葉による伝え合い」を手掛かりに、ワークシートの協議の視点に沿って、意見交換をしました。単に感想を述べ合うのではなく、保育参観や授業参観を通じて互いのよさや違いを実感したりすることが今後の工夫につながると考えます。

保幼小合同研修会の運営に当たっては、担当者だけに任せるのではなく、その域内の全ての保育士や教員の理解と協力の下に実施できるように配慮する必要があります。相互理解を深め、連携・接続を推進していくに当たっては、無理なく運営できる方法で、ときにはテーマに応じて外部の講師の話を聞く機会を設けるなどの工夫が考えられます。長期的かつ柔軟な視点で幼児期と児童期をつながりとして捉え、その上で発達の段階などに留意しつつ、子どものよさや長所を生かしながら、資質・能力を育み続けるという視点が重要となります。

今後も、研修等を継続的に実施し、そこでの学びや体験を蓄積し、連携・接続を発展させていくことが大切です。



事例13 Ⅲ期（1年生10月）
生活科—単元「あきと ともだち」—

事例を読み取る
キーワード

・つくりだす
喜びと楽しさ
・自然への親しみ
・興味や関心

<事例で伝えたいこと>

この事例では、活動に対する児童の「やってみたい！」などの興味・関心を引き出す言葉掛けや場の設定を工夫し、「架け橋期」のⅢ期における生活科で大切にしたいことについて考えます。

① 単元 あきとともだち 「さあ、なにしてあそぼう」（光村図書 せいかつたんけんたい）
第6～9時／15時間

【目標】

- ・秋の自然物を利用して遊ぶ楽しさや不思議さに気づき、工夫しながら楽しく遊ぶ。
- ・園児との交流会「あきまつり」の計画・実行を通し、お互いの取組の良さに気付く。

【担任教師が心掛けること】

- ・「何をしたら楽しいか」「何をどう作りたいか」という視点を明確にする。
- ・教師にありがちな「例年の活動を踏襲する」とならないよう、児童の発想を引き出すことをスタートとする。

② 実践

1、2年合同のあきまつり、近隣の幼稚園児や保育園児の参加を見込んだ計画を立てた。本年度は、例年一人ひとりが作成するどんぐりゴマや朝顔のリースづくりを必須の活動とせず、子どもたちが集めた秋のものから、主体的・対話的な取組を価値付けすることを重ねる授業づくりを行った。

		教師の言葉掛けと児童の様子（＊T＝教師 C＝児童）
1		T「あきのもの、たくさん集められたね！みんなすごいな！」「これで何かできることあるかな？近くの人と相談してみよう！」 →気軽にアイデアが生まれるような場の設定した →方法や内容を板書し、出てきた意見を価値付けた →なぜそうしたいか、ゴール（目的）を抑えた T「いっぱいアイデアが出てきたね。やっぱりみんなは、素晴らしい！あきともお友だちともますますなかよくできるね。」 T「〇〇さんが、幼稚園の子に来てもらいたいと言っていたけれど、どうやって呼べばいいのかな？」

		C「先生が電話をかけるのはどうかな？」 C「お手紙を書いたらどうかな？〇〇幼稚園の先生に、私、お願いできるかも。弟がいるから。」 T「〇〇さんや〇〇さんが『あきのおまつりを開こう』と言っていたね。何をしたら楽しいか、どの園児が来ても喜んでもらえるよう、みんなで考えていこう！」
2		※例年だと、教師がどんぐりゴマをつくろうと提示をしてきたが、あくまでも児童の発想を大切に活動とした。 T「どんぐりがたくさんあるね。何が作れるかな？」 C「紙皿に並べてみたよ、どうかな？」 C「それいいね、かわいいね。わたしも作りたいな！」 C「いいよ、一緒につくろう！」 T「どのようにして、園の子たちに遊んでもらうといいのかな？」 C「そうだね…どうするかな…」
3		※例年だと、育てたあさがおが枯れ、残った蔓で、リースづくりを全員で一つずつ作っていたが、蔓を利用したものづくりをするグループの想いを尊重した活動とした。 C「これじゃ、足りない。」 C「〇〇さんからもらえるか、聞いてみる。」 T「そうだね、お願いしてみるといいね。」 C「蔓が硬くて、うまくまとまらない。」 T「きれいな円にならなくても、この形も味があつていいと思うな。ほら、みんな違ってみんないいって言うでしょ～！」 C「うん、でも、もうちょっとがんばってみます！」 T「えらい！やってみることも大事だね。できたら教えてね。」

③ 実践をととして

○成果

- ・教師の児童への言葉掛けは、問いかけを大切にし、児童が自ら考えようとすることを引き出した。
- ・思い通りに作ることができない場面、友だちと意見が合わない場面では、解決方法を伝えつつ、

更に努力したり、折り合う言葉が出てきたり、切り替えたりできたところを価値付けた。

- ・ 児童の個性をお互いが理解しつつある時期である。配慮が必要な児童への関わりも、教師主導でありつつ、児童同士の信頼関係の構築につなげた。それぞれの児童の成長があった。

○さらにひと工夫するとよいこと【今後活かす架け橋期のポイント】

- ・ 試しながら、繰り返し活動し、より楽しくより工夫できる活動時間の配分・設定
- ・ 気付きの質を高めるため、児童のつぶやきを拾い、受け止める声掛け
- ・ 失敗しても、間違えても大丈夫、ドンマイと伝え合える学級の雰囲気づくり
- ・ 児童のかかわり合いを多様にするため、ペア、グループでの対話時間の確保
- ・ 規律があるが、規律ありきでない、「自由な時間」から生まれる児童の発想を引き出せる教師の感覚・感性・スキルの向上

④ 架け橋期のポイントを生かした、その後の児童の様子

- ・ 近隣の保育園、幼稚園を招待し、「あきまつり」は、大盛況に終わった。児童の振り返りでは、なぜ楽しかったのか、どうしてみんなが笑顔だったのか、具体的な言葉として、表現できていた。
- ・ 学校公開日に実施し、保護者からは、「家でも、どうしたら幼稚園や保育園の子が楽しめるかなと相談を受けたり、今日はここまで進んだの楽しく話をしてくれたりしました。」「子どもたちが本当に楽しそうに活動していて、こちらも子ども気分になりました。」「『秋とともにだち』がタイトルだったのですね。自然とも仲間ともふれあえる素晴らしい取組だと思いました。」などの、評価を得られた。
- ・ 次の生活科は、どのようなことをするのか、生活の授業が楽しみという声が増えた。
- ・ 他の教科等の授業でも、自分の考えや思いを伝えようとする場面が増えた。
- ・ 自分のよき、友だちのよきにも、目がいくようになった。



⑤ 事例13をとおしてわかったこと（2年生への見通しとⅡ期の振り返り）

Ⅰ期、Ⅱ期と、様々な体験を通した活動を経て、児童は、何がしたいか、何ができることなのか、遊び感覚を保持しながら、学ぶことの喜びを十分に体感してきました。

例えば、5月になり、朝顔が育っていく途中で、「このまま、茎が伸びていくと、朝顔は大丈夫かな？」と教師が児童に問うことからスタートし、「棒があったらよい。」という児童の発言に対して、「棒があると、なぜぐんぐん更に伸びると思うの？朝顔は喜ぶかな？グループで話し合おう！」と、対話を充実させ、考え伝えようとすることの楽しさを繰り返し価値付けてきました。

Ⅲ期の本事例「あきまつり」は、新型コロナ流行の3年間、活動を中止していました。一昨年から

ら復活しましたが、紙のお金を用意し、お店で買い物をする方法であったり、後片付けまで考えられた環境に配慮ある内容でなかったり、旧態依然の方法で、児童が主体となって活動するものではありませんでした。

そこで、教師の「なぜ？」を大事にし、児童のつぶやきや気づきから単元を構成していく方法を取ることにしました。実際は、単元構成は教師側で計画を立てていますが、児童が自ら計画を立て、実行しているという意欲を引き出すねらいがあったからです。

教師は、「教えること」を第一に考え、どう教えるかに視点がいきがちになります。また、「正解」が判るので、こうあるべきと誘導しがちにもなります。しかし、1年生とは言え、児童一人ひとりには、大人が予想もしない素直でピュアな感覚・感性をもっています。児童が主体的・対話的な学びを持続していくためにも、自由に発想する喜びを実感できる環境を創っていくためにも、教師が児童の未知の力を借りる、児童の思いつきに委ねてみる、というスキルを身に付けていくことも重要であると考えます。これは、人任せということではなく、客観的なかつ多様な見方や考え方を身に付けることでもあるからです。

児童の変容の基は、教師の変容にあります。2年生の生活科、更に他教科等においても、児童が安心して表現し合えることが大切であると考えます。また、表現方法は多様にあること、目に見えない内面の部分も育てていくことも忘れてはなりません。

保育園や幼稚園での育まれた自然や人とのかかわりを通した自立心を2年生でも更に伸ばさせていけるよう、教師同士の対話も大事にしていきたいと考えます。

事例14 Ⅲ期（1年生1月）

国語科 ICT機器の活用をとおして
— 単元「これは、なんでしょう」 —

事例を読み取る
キーワード

・ICTの活用
・言葉を使う
・2年生に
向けて

<事例で伝えたいこと>

この事例では、教科「国語」の教科書の内容から、1年生の3学期には、2年生に向けてどのように学習を進めているのか、小学校の実践を取り上げます。子どもたちは、小学校に入り一人一台のタブレットを貸与されています。タブレットを使ってどのような学習をすすめたり、どのように活用したりしているのか事例をとおして考えます。

① 内容

○単元「これは、なんでしょう」(光村図書) 第2時/4時間

【目標】身近なことから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶことができる。

互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐことができる。

【担任教師が心掛けること】

- ・個人、ペア、グループなど学習する人数を変えることで、学習に取り組みやすい環境をつくる。
- ・文字を入力することが難しい児童の実態を踏まえ、タブレットを使ってクイズをつくることで、楽しみながらICTの活用方法を身に付けられるようにする。
- ・操作の仕方が分からないときは、児童間で質問したり、教え合ったりする環境づくりをする。

【幼児期の経験を生かす工夫】

- ・操作の方法を幼児の生活経験の中でイメージしやすくわかりやすい言葉にして例えたり、子どもたちがわかるような名前を付けてもらうことで、機能の名前や読めない漢字で書かれていても操作ができるようにした。
- ・何度も使用するアプリケーションや機能については、掲示物を作成し、周りを見れば自分たちで活動が進められるように常時掲示しておく。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T＝教師 C＝児童

<導入の場面>

T 今日はみんなにクイズをつくってきたんだけど やってみる？

C 国語なのにクイズなの？やる！

T じゃん！ これはなんでしょうクイズだよ。（黒板に問題を写す。）

ヒントを出すから何か当ててくださいね。

ヒント① これは丸いです。

C ボール？ 磁石？ お月様！

T 丸い物だけじゃ、たくさんあるね。ヒント②です。時間がわかります。

C あ！時計だ。 簡単だよ。もう1問だして。

T 先生一人だと、たくさん問題出すの大変だから、みんなでつくるのはどう？

C クイズ大会みたいだね。1年1組のクイズ大会だ。

T では、この学習は最後に「1年1組のクイズ大会をしよう」でいいですか。

C 何問つくっていいですか。

C 答えは何でもいいですか。

C でも答えがわからなかったら、面白くないよ。

T 少しルールがあった方がいいのかな？

C はい。みんなが楽しくクイズ大会をするなら、ルールがあった方がいいです。

<児童の気付きを取り入れ生かす>

・「答えがわからないと面白くない」という児童の考えから、皆が共通でわかるものは学校にあるもの。という、考えの元問題づくりを始めた。

C この間の先生のクイズは簡単だったよね。

C 時間がわかるものって、時計しかないもんね。

C でも、タイマーも時間がわかるんじゃない？

C そうだね。似ているところをヒントにすればいいのかも。

T 何かいい方法があった？そうか、「時間」という言葉はすぐにわかるヒントだけど、「丸い」はたくさんの物が思い浮かぶから難しいヒントなんだね。

C 最初に簡単なヒントだと、すぐ分かって面白くないよ。

C 先生ヒントは隠したいんだけどどうしたらいいですか？

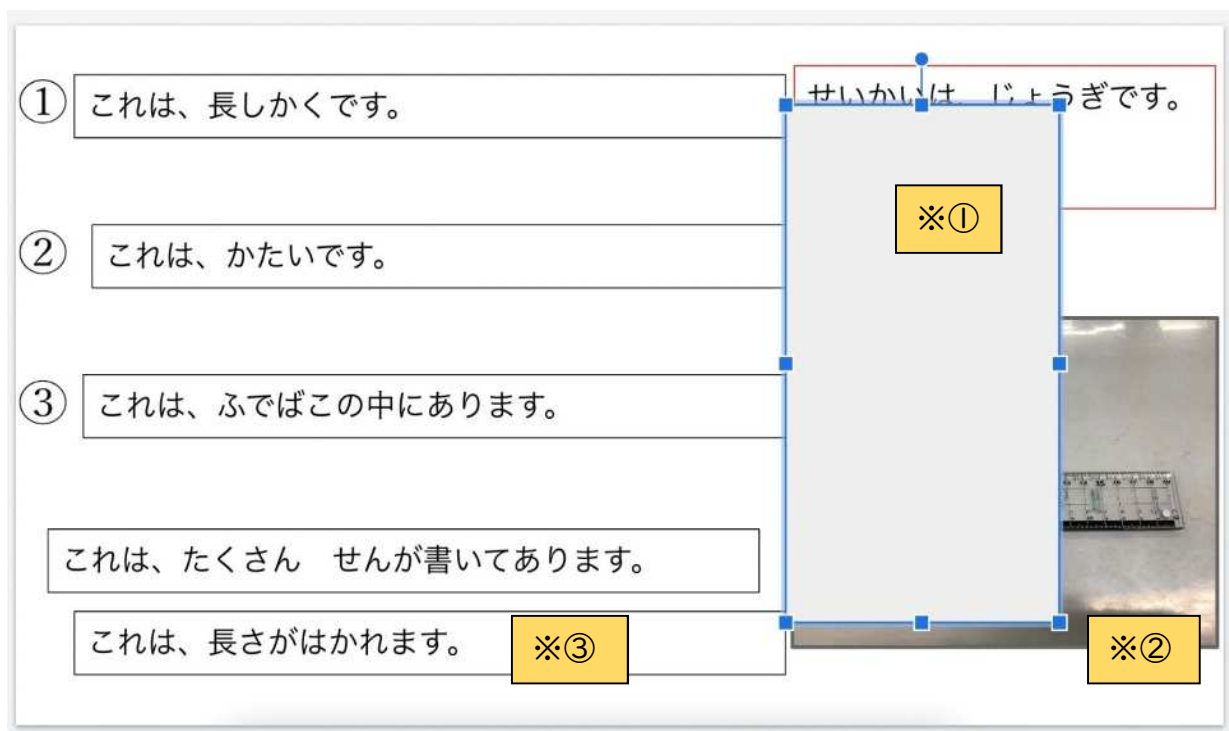
T ヒントを隠す方法ですね。※①

C 答えの写真を入りたいです。※②

C やっぱりヒントの順番を変えたいです。※③

T これまでに使っていない機能も使ってみよう。

【実際のタブレットのイメージ】



児童が考えたクイズの画面

※①図形を重ねることで、文字や写真を隠すようにした。

児童は「おふとんをかける。」という言葉で操作を覚えていた。

※②1学期から写真を撮る学習を進めている。この授業では、写真の取り込み方を学んだ。

※③今回は Google スライドのアプリケーションを使うことで、BOX 内に文字を打ち、自由に順番を入れ替えられるようにしたり、同じスライドを数枚用意することで、好きなだけクイズをつくれるようにした。

② Ⅱ期の「ことばのとびら」以降のⅢ期の小学校の学習の理解を深める

実践をもとに、Ⅱ期以降の国語の授業について協議をしました。

(幼 T=園の先生 小 T=小学校の先生)



幼 T 小学校では、一人1台タブレット端末を使用して授業が行われていますが、1年生の後半に入ってくると、タブレット端末を自分たちでスムーズに操作しているので驚きました。園でも子どもたちの生活の中に、タブレット端末やスマートフォンなどはとても身近になっていることを実感します。タブレット端末を使用した授業は、1年生のいつ頃から始まるのでしょうか。

小 T 確かに、この時期は、どの子どもたちも慣れてきているので、授業もとても進めやすいです。

タブレット端末を使用した授業は、4月から行っています。最初は、つい操作の説明が多くなってしまいましたが、子どもたちが苦手意識をもってしまうと、その後の授業が楽しくなくなってしまうので、そうならないように、いろいろなことを楽しく身に付けていけるような配慮をしています。

幼T どのような配慮をしているのですか。

小T 例えば、タブレット端末の操作に関することは、いきなり専門用語を使っても理解できないので、子どもたちがイメージしやすく、わかりやすい身近な言葉を使います。子どもたちから出てくる言葉もたくさんあります。バッググラウンドで開いているアプリを全部閉じるときには、ダブルクリックしてスワイプして消しますが、この操作を「カチカチして バイバイってするんだね。じゃあカチカチ バイバイだ」と言ったり、「画像」という漢字が読めないときは横の絵を見て「お山の絵だからお山って覚えよう」と言ったりします。その子どもたちの言葉をそのまま使っています。また、ICT機器を使うと、画面からイラストが見えなくなってしまうことがときどき起きます。子どもたちは予期しないことが起きると使うことが怖くなることもあります。そのようなときも子どもたちは、「先生、絵がお散歩してみたい！いなくなっちゃった」と教えてくれます。その言葉をそのまま使って「お散歩に行ってみえなくなっても、後で帰ってくるから大丈夫だよ」と伝え、子どもたちは安心して学習に戻ることができます。



幼T わかりやすい言葉を使うことで、言葉の意味も理解できますし、置き換えなどもできてきますね。これは、教師の語彙力が重要ですね。別の優しい言葉に言い換えたり、補足したりするなど、わかるように伝えることが重要になってきますね。

小T 学習の内容にもよりますが、操作に「慣れる」ことによって、より使いやすくなっていきます。4月の当初、教室内で初めてオンラインでつながったとき、学級みんなの顔が分割して画面に一度に出てきたとき、子どもたちは「わあ！」と驚きとともに手を振るなど嬉しそうにしていました。そして、担任が画面に現れると、みんな同じ教室内にいるにもかかわらず、「あ、先生だ！」と画面に手を振って喜んだり、右下の画面に出ている自分の顔をのぞき込んだりして、面白がっていました。タブレット端末も教科書と同様に教材の一つとして、初めての出会いを大切にしています。

幼T 園でも、初めて出す遊具や初めて使う用具は、単にその機能や特徴を伝えるということではなく、「こんなことができて面白そう」「やってみたい」「使ってみよう」など、子どもたちの心がワクワクするような動機付けをととても大事にしています。それは、タブレット端末との出会いでも同じということですね。

でも文字入力、少し難しいように思います。どの子どももキーボードで打てるようになるのでしょうか。

小T 最近は家庭でもICT機器の利用が増えているため、キーボードで文字を打てなくても、フリック入力を利用することで文字入力ができる子どもも多いです。また、学習した50音表のキーボード画面も利用できる、子どもたちは自分が使いやすいツールを使って入力しています。他にも文字を探すのに時間がかかる場合は、直接画面に文字を書き込むという方法もあ

ります。

幼T なるほど。自分に合う使い方も学習の中で見付けることができるんですね。

小T ICT機器の技能を高めることなく、ICT機器を利用することで自分に合った学習の仕方を学ぶことを重点に置いています。ICT機器の技能は、必要に応じて学ぶことで「使いやすい」「こうするとわかりやすい」と感じるのではないのでしょうか。

幼T 教科の学習のように指導内容が決まっていて、それを教え込む学習ではないということですね。

小T はい。

幼T さらに上の学年では、どのような学習をするのですか。

小T 3、4年生になると、友達と考えを共有したり、調べ学習をしたり、調べた内容をまとめたりする学習も増えてきます。高学年になると、プレゼン資料をまとめたり、自分のペースに合わせて自由進度学習（＊6）に取り組んだりすることもあります。自由進度学習では、児童が入力したものやデータで提出したものを基に教員がタブレットを使って児童の学習の進み具合を確認したりします。

幼T 学年の発達の段階に応じてICT機器を活用した学習が進められているんですね。

小T 幼児期に「こうしたらどうかな」「もっと知りたい」などの「やってみたい」を遊びを通して学んできた子どもたちだからこそ、ICTという新しい学習ツールにも柔軟に対応できるのだと思います。これは、ICTだけではなく、すべてに通じることで、学びに向かう大切な能力だと感じます。



指またはタッチペンの使用、立てる、寝かせるも自分の学習方法に合わせて使用する



友達の画面で共有しながら学習を進める



自分の作品の写真を撮って、共有シートに張り付ける。
共有シートで友達の作品にリアクションやコメントを入れ合う

＊6 自由進度学習…「学習計画表」に基づいて自分のペースで教科内容を学び進める学習方法である。その際、教師は子どもたちの自立した学習が成立するように、学習材や学習環境を整える。

③ 国語の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

Ⅱ期では、児童はそれまでの経験を基に学習を進めています。Ⅲ期に入り、2年生に近づくにつれ、児童はこれまでの経験を使った学習の進め方を身に付けていきます。例えば、Ⅰ期で培った言葉を基に、Ⅱ期では自分たちで言葉遊びを楽しむことができますようになります（事例8）。

Ⅱ期からⅢ期までの国語では、言葉遊び、文字の学習、読書、音読、ノートをとる、発表、話し合い活動などの学習活動を経験します。Ⅲ期に入ると習得した言葉を使って文章を書いたり、伝え合うだけでなく共感したり、質問したりしながら話をつなぐことができますようになります。会話がはずんだり、自分の思いが伝わったりすることで「学習が楽しい」「次はもっとこうしてみたい」という気持ちが生まれてきます。

④ 事例14をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

まず、ICT機器の活用についてです。

文字の学習を始める1年生前半では、文字入力ができないため、手書き入力から50音表での入力、その他の活用方法が中心となります。1年生後半では、文字を入力したり、様々なアプリを使ったりした学習活動が始まります。

しかし、必ずしもタブレットを使うことが児童の理解を早めたり、活動をしやすくしたりわけではありません。文字を読む・書くなどの基礎的な力があるからこそICT機器を活用すれば児童の学習の仕方に合わせたICT機器の使い方を工夫することが大切です。

今後も、実践の中でよりよい活用の仕方について、引き続き、教材研究することが大切です。

以下に、発達の時期に応じたICT機器の活用例をあげてみました。

【ICT機器の活用例】

幼児期 ○ICT機器の種類

タブレット端末、マイクロスコープ、電子黒板機能付き大型プロジェクター

○活用例

音楽を聴く 写真を撮る 動画を視聴する

検索機能で調べたいことを調べる みんなで共有する

拡大して見る

など

*幼児の場合は、教師と一緒に活用することを前提として活用する

1年生前半 写真を撮る・張り付ける チャット機能による連絡を受け取る

オンライン会議（授業）の参加の仕方

情報モラルについて タイピング 手書き文字での記入

アンケートの回答

1年生後半 アプリを使った課題の作成（本事例）

キーボード（かな打ち）による文字入力

次に、Ⅲ期の本事例から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに振り返ってみます。

本事例からは、幼児期に、様々な経験が学習の根底にあることが分かります。例えば、本事例では、相手に伝わるように言葉を選んだり、自分の気づきを相手に伝えたりする「言葉による伝え合い」が中心となっています。また、学習の計画を立てクイズをつくり、発表し合うまでの学習に向かう「自立心」、クイズのヒントを簡単な順から並び替える「思考力の芽生え」などは、幼児期に育まれてきた資質・能力が基になっていると考えられます。これらの資質・能力を発揮する新しい環境が、ICT 機器を活動した学習環境といえるでしょう。

2 園・小学校における環境の構成の工夫

子どもが安心して小学校生活を始められるようにするためには、どのような環境の工夫が考えられるでしょうか。幼児教育で実践している「環境を通して行う教育」の考え方を小学校教育においても活用、工夫することが大切です。ここでは、園や小学校での工夫の一例を取り上げています。

子どもの実態や保育室・教室、園や小学校の状況に応じて、物の置き方や準備する物の数、掲示物等を整えることが重要です。

○一人ひとりに応じた工夫や配慮

靴箱、ロッカーの位置、座席などは、身長や体格のほか、眼鏡着用等、名簿の順番によらず、個別の状況に応じて柔軟に対応することが大切です。

○だれにでもわかる環境

保育園や幼稚園で行っているように視覚的にわかるような表示や掲示をしたり、物の場所を固定したりすることで、安心して自分から行動できる環境となります。入学したての1年生だからという理由にかかわらず、だれにでもわかる環境を用意することが重要です。

①学級のカラーで表示	②提出物の分類
文字が読めることを前提とせず、文字の表示とともに学級の色でわかるようにします。 	園での経験を生かして、自分で所持品を管理できるようにします。 

○見通しがもてるような工夫例

カレンダーや週の予定など、大人側の予定ではなく、子どもにとってという視点にたち、子ども自身が絵やイラストなどで期待をもって取り組めるように工夫することが大切です。

【園での工夫例】

①当番の見通し（日、週）	②予定の見通し（月）
	

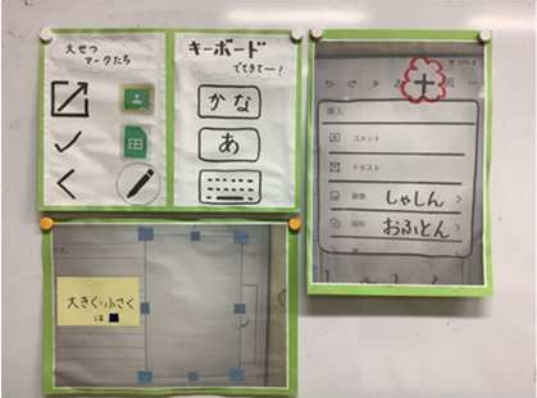
【小学校での工夫例】

○子どもの「やりたい」気持ちに応える工夫

[illegible]

一人ひとりが、やりたい係を決めていく。
一つの係の人数をあらかじめ決めずに行う。

○タブレット端末に関する工夫

①タブレット端末の操作の仕方	②視覚的にわかるようにする
 (画像→しゃしん) (図形の四角→おふとん) ※言葉を置き換えて意味がわかるようにする	
③文字が打てなくても二次元コードで表示し、補助する	
	

